●金沢大学ワンダーフォーゲル部 OB 会・会報誌「やまざと」VOL. 22……THE・チョンボ号 2008 年 6 月

08 年 9 月 14 日 KUWV 創立 50 周年記念パーティ案内号

「大笠山で出会ったカモシカ君」　21 期　竹中びん（イラストと文）

ある雪晴れの日、大笠山を望む尾根でカモシカ君と出会った。山に暮らす彼は一生のうちで、いったいどれだけの生き物と出会うのだろうか。寂しいと思う時があるのだろうか。

ぼく達人間は、街で大勢の人達とすれ違いながら、それぞれ自分達の世界の中で暮らしている。けれども、ぼく達はその人達と知り合うことも、同じ価値観を共有することもないだろう。大勢の人達の中にいても、決して知り合うことのない淋しさの中で生きているのだ。

でも、あの時、ワンゲルに集まった仲間は、共通する価値観を持つことができた。喜びや楽しみを分かちあえる世界が多いほど、人は豊かな気持ちになれるような気がする。

大笠山で出会ったカモシカ君は、ぼくにとっても、心豊かにしてくれる思い出として、今も生きている。

特 集

愛しのチョンボたち

やまざと

「やまざと」VOL. 22　愛しのチョンボ ＆ KUWV創立50周年記念パーティ案内号

◎表紙　大笠山で出会ったカモシカ君――21期・竹中　敏（イラスト＆文）
やまざと　題字―― 23期・中川晃成

1p　KUWV創立50周年記念パーティのご案内――20期・久富象二

2p　金沢大学ワンダーフォーゲル部創立50周年を迎えて――19期・栂　典雅（OB会会長）

●顧問・前顧問の先生方から
3p　50周年おめでとうございます――竹内義晴　先生
4p　ワンゲル顧問と事故――前田達男　先生

●特 集　愛しのチョンボたち
6p　我が胸に人に言えざるチョンボあり「カリントウ篇」「千歳篇」―?期・砂糖和菓子
8p　留年…ああ、切なきかな僕のチョンボ！――20期・松下和隆
9p　「ああ、槍ヶ岳」――?期・匿名希望女子
9p　恐怖の小桜平避難小屋――19期・N. T.
10p　老いのチョンボ――15期・舟田節子
14p　今でも忘れられない私のチョンボ――22期・森　恵利子
14p　チョンボしなくてよかったこと～頂上目前の下山～ ――26期・畠山　潤
15p　新宿駅まで乗り越したリーダーの山靴――20期・久富象二
15p　ポールを忘れたこと、そしてほんとの最大のチョンボは… ――46期・杉村明慶
16p　今だから笑える30年前のチョンボ――23期・鳥越伸博

17p　目で見るベルクハイム――11期・加藤忠好

●メール宅急便　「寄 稿」
19p　東京マラソンを走るの記――6期・合津　尚
20p　ネパール展始末記――15期・舟田節子
27p　田村大兄 雑感あれこれ――3期・田村昭夫
28p　ＧＷ春スキー！　妙高・火打連峰スキーツアー報告――11期・青柳健二

32p　2007年 OB会会計報告――23期・鳥越伸博

33p　ＯＢ有志たちのランタン・フラワートレッキング12日間――15期・舟田節子

●おお、小屋酒場
50p　07年秋――15期・舟田節子・佐野哲雄　16期・北川隆次　6期・合津　尚　11期・加藤忠好
58p　08年春――15期・奥名正啓
60p　女史のコトバ、信ずるべからず… ――7期・吉村弘二

61p　07・08年 現役活動報告――22期・森　恵利子
62p　50期主将の挨拶――50期・大和英仁
63p　51期主将の挨拶――51期・浦地好古

金沢大学ワンダーフォーゲル部　創立５０周年記念総会・懇親会

標記の総会・懇親会を下記のとおり開催いたします。出欠は同封のハガキでお知らせ下さい。多数ご参加いただきますようお願いいたします。

20期　久富　象二

記

日　時	２００８年9月１４日（日）	１５時３０分	受付
		１６時　～　１７時	総会
		１７時　～　１９時	懇親会

場　所　　金沢市大手町２－３２　KKRホテル金沢　TEL ０７６－２６４－３２６１
（金沢城公園大手堀前）

会　費　　６，０００円（当日徴収いたします）

9月１４日にKKRホテル金沢で宿泊を希望される方は、同封のハガキでお知らせ下さい。（シングル朝食付で7,000円　３０室を仮予約してあります）

※　出欠ハガキの締め切り　　7月３１日

※　参加希望者にはスケジュール等の詳細なご案内をお送りします。

9月１５日（月）　医王山メモリアルトレッキング

８：３０	KKR出発（バス、宿泊者のマイカー）
９：００	金沢大学駐車場集合
９：３０	医王山ビジターセンター着・発
１２：００	白兀山頂で昼食
１４：３０	医王山ビジターセンター着・解散
１５：３０	KKR着（バス、宿泊者のマイカー）

＊　朝食は各自でお願いします。昼食・行動食は用意します。

＊　参加費用は当日徴収させていただきます。

＊　コース等は変更になることがあります。小雨決行。

日光を浴びよ　自然に親しめ
浩然の気を養え　民謡を唄え
山に登れ　伝説を取りもどせ
祖国の土に芽ぐむ魂を思え
そしてさらに
身体を健全にし　厳格にして自己を訓練し
青春の精力を濫費するな　（創立モットーより）

金沢大学ワンダーフォーゲル部創立５０周年を迎えて

ＯＢ会会長　　栂　　典 雅（19期）

金沢大学ワンダーフォーゲル部が半世紀に及ぶ歴史を刻んできたことに、今あらためて感慨を深くしているところです。

高度経済成長期、バブル経済の崩壊、そして就職難、学生気質の変化・・・。こういった日本の社会の変動がワンゲル活動にも大きく影響していることは、いまさら言うまでもありません。

思い返せば、我々現役員が現役だったころが最も部の規模が大きく、部員数は９０名を超え、体育会系ではもちろん、大学の全サークルにおいても一，二を争うほどでした。それが、いわゆる３Kが嫌われる風潮から部員数が減り続け、特に女子は学年に１人もいないという期もあったと聞いています。しかし、近年は部員数も漸増し、女子が主将を務めることもあたりまえになっているようです。

一方、ＯＢの数は500名を優に超え、その年齢構成で言えば、すでに三世代に及んでいます。このようなＯＢ会をまとめ、運営していくことは容易ではなく、明確なビジョンは持ち合わせてはいないものの、今後は旧来とは異なるやり方、システムにシフトしていかざるをえないのではないかというのが、いまの偽らざる心境です。

このような状況のなかで、関西や関東などの地域ごとに一線をリタイアされたＯＢの方々が中心となり、活発な活動・交流が行われるようになってきたことは、たいへんに喜ばしいことであり、ひとつの方向性を示しているのではないかと考えています。

さて、この５年間、我々役員の力が及ばず、ＯＢ会員諸氏にはなにかとご不満もあったことと存じます。ここにお詫びを申し上げる次第です。しかしながら、なんとか会を維持し、５０周年の記念行事に向けて準備を進めているところです。

また、僭越ながら、５年前の総会において提案をさせていただいた５０周年記念の「歌」もカタチになってまいりました。つきましては、「金大ワンゲルOB会愛唱歌」（案）として、次の総会でご披露をさせていただき、ご承認を賜ればと思っております。

いずれにいたしましても、会員諸氏におかれましては、次の総会・記念行事への多数のご出席をお願い申し上げまして、巻頭のごあいさつとさせていただきます。

金沢大学ワンダーフォーゲルＯＢ会 愛唱歌（案）

♪森のうた

一、
キミは憶えているかい？
雨あがりの森のにおい
氷りだす月
オレンジに染まる谷 くだったこと

ボクは　ほしい
雲のように
変わりつづけるこころ

二、
ボクは持っているかな？
峰の奥の空の深さ
鳥の孤独
あの山でキミがつぶやいた言葉

ボクは　ほしい
オオシラビソの
立ちつくす激しさを

三、
キミは知っているかい？
にこ毛 そよぐブナの森を
山靴の夢
倉谷のタムシバの花の白さ

ボクは　ほしい
カタクリの
日なたに躍る気持ち

顧問の先生方から

５０周年おめでとうございます

竹内　義晴

４９年目から顧問をしている竹内です。集団行動が苦手で、山に行っても、どこかの大学のワンダーフォーゲル部なんかがいると近寄らないように休憩をとったり、別の道を選んでいた私が、何の因果か、ワンダーフォーゲル部の顧問になりました。しかし、性格ですから、顧問になっても、山は一人で楽しむものだという考えは変わりません。

山は基本的に一人で楽しむものですが、危険の伴うことですから、仲間がいて、技術を高め、教え合い、また力を合わせて行動することが大切なことはよくわかります。しかし、それであっても、私は私であって、あなたや彼、彼女ではないですから、楽しむのは一人の私ですし、その行動の責任もまた私一人にあります。

山を楽しむ人間だったら誰にでもわかってくる、個人主義のきびしさの話になってきました。個人主義のきびしさがあってはじめて、集団行動もその真価というものを発揮できるのでしょう。山での集団行動に、しごきやいじめ、危険行動などの暴走があるとしたら、それは集団の構成員、特にリーダーに個人主義の厳しさが欠けている、つまり甘えがあって、状況を正確に把握できないからだろうと思います。甘えが出てくるというのもまた、私たちの拭いがたい本性ではあるのですが。

しかし、顧問になってわかってきたのですが、金沢大学のワンダーフォーゲル部には、そのような甘えを排除する努力を重ねてきた素晴らしい歴史と伝統があるようで、これはうれしい見当違いです。他方、その素晴らしさを、技術面においても、精神面においても、正当に引き継いでいくことがなかなか難しくなっていることも現実です。しかし、顧問として、現役の安全で充実した活動にいくらかでも貢献でいたらと考えていますので、言葉足らずですが、OBの皆さん方のサポートをよろしくお願いします。

（　現顧問　　２００８年度～　）

元顧問　前田達男先生から

ワンゲル顧問と事故

前田　達男

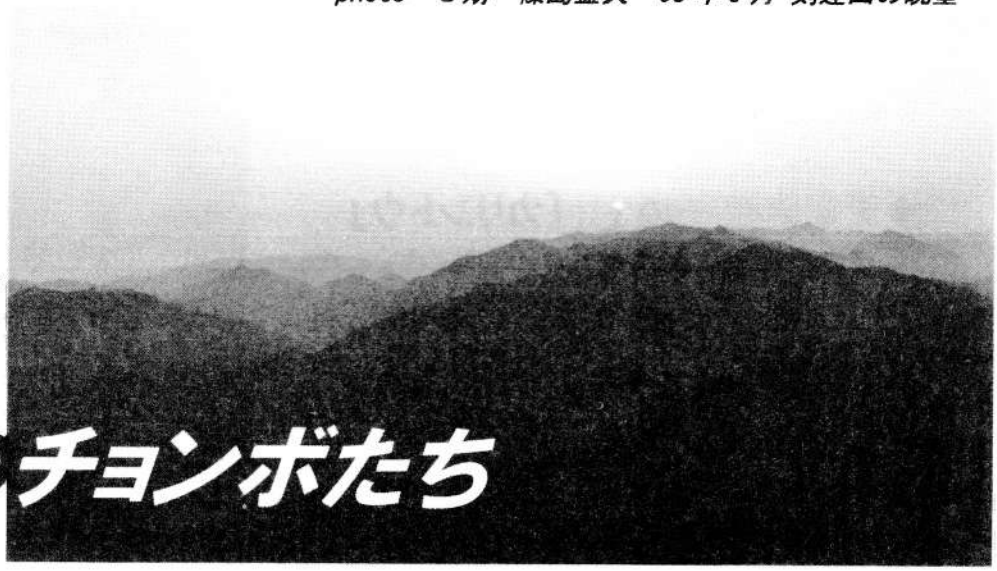
2007年3月末で定年退職となった（国立大学法人化後は「退官」とはいわない）。「定年退職おめでとう」と言われると抵抗感もあるが、無事に定年まで勤めることができたことがめでたいと言われているのだ、と解釈することにしている。もっとも、大学の勤めのほうは、理学部の入試ミスの際、全学の入試運営委員会委員として職務怠慢であったと厳重注意のお叱りを受けた以外、何事もなかったが、ワンゲルのほうはそうでもない。

顧問就任の翌年、見越山での滑落（夏合宿トレ、自衛隊ヘリ出動）、続いて、犀奥・倉谷川での転落死（卒論事前調査、大々的な捜索）、犀奥テン場での火傷（新トレ、金大病院で形成手術）、針ノ木谷で指を失いかけた事故（PW、黒四ダムの船出動）、剱岳での落石による転落・出血死（PW、救護隊・県警ヘリ出動）などがすぐに思い出される。ただ、霊前に線香を供え、医師から話を聞き、関係方面にお礼と報告に出向くことはあっても、記者会見で頭を下げ、不祥事のお詫びをするという場に登場することはなかった。

事故はもちろん起して欲しくはないが、何かを為さんとして迷い、ミスをするのが人間である。Es irrt der Mensch, solange er strebt.(Goethe:Faust)　何もしなければ事故もないが、そんな顧問は面白くない。金大のワンゲルは、時々（小さな！）失敗はするが、登山道の整備など社会貢献でも頑張っている、山・ロードで会っても好感のもてる若者たちだ、と皆から弁護してもらえる、そういうワンゲルをこれからも見守っていきたいものだ。

（金沢大学名誉教授、顧問1976～1987、1989～2007年度、
1988年度はドイツ留学）

photo　8期・篠島益夫　08年5月 剣連山の眺望

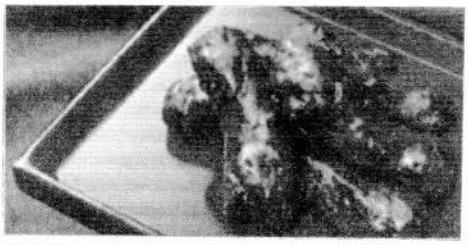


特集
愛しのチョンボたち

１年装備係のＴクンが、ガスボリを忘れ、
一泊のワンデリングで帰ってきた「北ア燕ＰＷ」。
しかし、そんな状況下でも
Ｋリーダーは、焦らず、騒がず、やさしく微笑み、
１年Ｈクンは、拳を後ろ手にかくし、
ボクは、遠く燕のピークをただただぼんやり望むのでした。
チョンボは、かなしい。
チョンボは、怒り。
チョンボは、悲惨だ。
でも、いつだってボクたちは
チョンボを笑い飛ばしてきたじゃないか！
チョンボをエネルギーに変えてきたじゃないか！
心根ふかきワンダラーたちの度量で…。

（19期　M.O談）

《我が胸に人に言えざるチョンボあり



◆チョンボ その１ 「カリントウ」

私は便秘とはあまり縁がない。快食快便。その消化器の分解能力はギャル曽根ほどではないが、これは雪山では不向きだ。

１年の冬合宿だったと思う。朝出発して１回目の休憩タイム。いつものように食べたらすぐに出したいので、そこらへ雉撃(きじう)ちに行きましたとさ。

（雉撃ちというのは男性用語で、女性には違和感ありです）

辺り一面のまばゆい白銀の世界。隠れる茂みはないし、遠くに行くにも時間がないし怖いし。適当なところでしゃがんで“おはようのうんこちゃん”。ごめんね。真っ白な、純白の完璧なる地に汚物をおいて。でもねぇ、これもそのうち肥やしとなり何かの役に立つ。エネルギーの循環だ。遠くの山々の美しい景色を見つめ、身も心もすっきりしました。

でも、傍らを見ると××君が立っているではありませんか。彼もまた遠くを見つめて（？）排泄行為をしていました。“うそー。”“××よ、いつからいたんだ？”“降臨したんか？”ただただ狼狽して無言のまま、さっさと列に戻った私です。ここまでは××のチョンボだと思う。でもここからは私のチョンボ。

２回目の休憩タイム。後の２年男子のヒソヒソ話が耳に入ってきた。

「さっきまでは無かったよな。茶色の足跡。」

「うん。・・・どっちかな。」

「どっちだと思う。・・・」

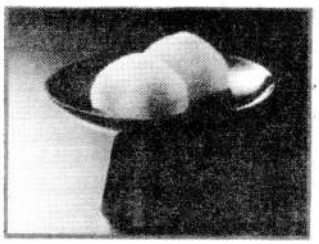
疑われているのは、もちろん先頭を歩く先輩と２番目を歩く私。

あんまりあたふたしたので、うっかりうんこちゃんを踏んでしまったことも気がつかなかったようだ。当時 18 歳のうら若き乙女は「すみません。それは私です。」とは口が裂けても言えず、ひたすら聞こえないそぶり。靴底を拭うこともできず、自然消滅を願いつつとぼとぼと歩きました。

『雪山の合宿なんかキライダ～～イ！』

忘れたころに　乱したる君》

？期　砂糖 和菓子(さとう わかこ)



◆チョンボ その２「千歳(ちとせ)」

さっきのチョンボは半ば天災。今度のは完全人災。２年生のＰＷだった。

金沢には“お菓子をあげたりもらったりの繰り返し”という変な風習があるところで、なにかしら家にはいつも和菓子がころがっていた。

出がけにめずらしく母が「森八の千歳もってくか。」と６個パックを手渡してくれた。皆で食べれば、という意味かなとザックに入れた。

そのＰＷは海あり山あり島ありと変化に富んだ面白いものだった。何日目かに雨が降って１日中小屋で沈殿した。みんな、それぞれシュラフの中に入り１日中ゴロゴロしていた。リーダーさんの頭の中はこれからの日程調整とかいろいろあるかもしれないが、私には“そんなの関係ない”。何にもすることがなく、時間だけがゆっくりと流れ、かったるいけど幸せな繭の中。

その時、千歳を持ってきていることを思い出した。

「ねぇ、お菓子があるんだけど食べる。」

というのが普通だが、ひみつの和菓子ちゃんはそんなことはない。

幸せそうなそれぞれの繭の中をこじあけるのもかったるいし、甘い物の誘惑もまさり、こっそり１つ食べた。

たちまち脳内を走るセロトニン。“おいしい！”

もう１つ食べた。

だんだん胃袋がゲッツリしてきたけれど、結局のところ６個とも完食しました。

・・・さもしいよね。ワタシ。

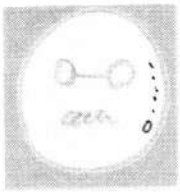
今思い返せばシュラフの中は個室。

１つテントの中も楽しいけれど、個室もほしい。

個室の中に密かにカステラとかまんじゅうとかにおいも音もしないお菓子を常備しておいてもよかったかも・・・。

冬眠中のリスのように幸せだったかも・・・と思います。

『これってチョンボじゃないよね！』



留年・・・ああ、切なきかな僕のチョンボ！

タラ～

20期　松下和隆

女房が言った。「あなたのチョンボは何かって？　そりゃ、留年でしょうよ。たしか、２回だったわよね」。

うっ！　俺のトラウマに触れてくれるな（今の僕は、大学生の息子に、留年するなとは言えないでいる）。

僕は、大学を６年かけて卒業した。教養から専門にあがるときに１回、ほいでもって、卒業直前にまた１回、合わせて２回留年した（こんなもん、合計なんかせんでええわ！）。

１回目の留年は、晴天の霹靂（ヘキレキ）のごとく僕を襲った。秋の「小屋作業」を終えて、ワンゲルの部室に戻ったとき、Ｍグチ先輩がニヤリと笑って、僕を迎えた。

「俺たちの学科（物理学科）は、難しいぞよのぉ～」

Ｍグチ先輩は、御自ら、ご留年をご経験あそばされた方だ。それだけに、そのお言葉には、ただならぬ重みがあった。ドキ！

僕は、直ちに理学部の玄関へと走った。ない。進学者リストに、僕の名前が…オー、マイゴッド！　なんでだよ。なんで倫理（２単位）ポッキリで、留年になるんだよ！

不条理を感じた僕は、鎧（よろい）教授の部屋へと赴いた（もう３０年も昔のことだから、実名だしてもいいよね）。

「先生！」

「なんじゃ」

「傲慢について書け、とおっしゃいましたよね。だから僕は、サルトル的解釈について、答案用紙（わら版紙１枚）の表にも裏にも、びっしりと書きました。不可の理由は何なのでしょうか？　僕は、この倫理のみで留年なんです。ご見解を、ぜひ聞かせて下さい」

僕は、教授に詰め寄ったのだった。すると教授は、意外な様子で、

「えっ、そうなんや？　そりゃ、すまんことした。教務に掛け合ったる。それで、えーかのぉ」

……！？　僕は、拍子抜けした。合否判定の説明如何によっては、刺し違える覚悟だった。しかし、不可を出した教授本人が、教務と掛け合ってくれるという。そんなら、まっ、いっか。そう思った僕は、その場をあっさりと後にしたのだった。当時の僕は、まだ紅顔のウブな青年だった。

３日後、連絡がないので、また教授の部屋に赴いた。

「あっ、あの件ね。だめだってよ。教授会で、私が頭さげなあかんのやわ。　ちょっとそこまでは、でけへんわ」

やられてもーた。おお、これぞまさに、「ガス抜きの術」だ（実は私も、会社でよく使う術である）。僕は、若くして、その術中に入ったのだった。

僕は、もうアホらしくなって、それ以上追及する気が失せていた。

結局、「不可の理由」は分からずじまいである（今となっては、もう、どうでもいいことですが…）。

その昔、西田幾多郎が、学生の答案を階段からばらまいて、遠くから順番に、優、良、可、・・・と採点したという。

我が母校、金沢大学には、この伝統が脈々と受け継がれているやも知れない。

この留年のおかげで、今の僕は、晩年の西田幾多郎、その心境地に近づくことができた。

人は人　吾は吾なり　とにかくに
吾が行く道を　吾は行くなり

今回はこれで、おわり、です。

あっ、そうそう、留年２回目の理由は、何かって？　それは…、またの機会にします。

「ああ、槍ヶ岳」

匿名希望女子

チョンボかぁ、私何かあったかな？　チョンボがないのがチョンボだったかなあ、なんて単に忘れているだけ、思い出せないのです。

そういえば１年の冬山合宿で水濾し用のガーゼ忘れて冷や汗、TP を幾重にも重ねて代用し、難を逃れたことがあったけど・・・ちっぽけだ。

そうだ、恥ずかしかった思い出でチョンボの代わりにしよう。

１年生の夏山合宿で憧れの「槍ヶ岳」を目指していたときのことです。

１年生の私はセカンドで黙々とピーク目指していました。これが槍か、さすがに岩だらけ、でも案外近いなんて思いながら岩場に足をかけては登っていくうちピークに到着。やったー！！とそれなりの感激に浸ろうとしている私に、後ろを歩いていた N 君が恥ずかしそうに小声で知らせてくれました。「おい、ズボン破れとるぞ」

名峰槍ヶ岳の思い出がガラガラと崩れ、破れズボンの思い出となった次第です。

恐怖の小桜平避難小屋

１９期　N.T.

ぼくが、初めてリーダーをした秋の白山 PW。明日は岩間温泉に下山という小桜平の夜。わずかのアルコールはすぐに底をつき、番茶を飲んでは盛り上がっていた。

何度目かのお茶を沸かそうと、食料係の K 嬢（としておこう）は、ポリタンの“水”をコッヘルに空け、音を立てて燃えるブスに乗せた。と、立ちこめるガソリンの臭い？

「火を消せぇー！！！」　あと何十秒かいや数秒かも・・・遅かったら、小桜の小屋を全焼していたに違いない。ちなみに、小さな避難小屋でも、資材をヘリで空輸するということもあって、建築費は２～３千万円にもなる。

「在りし日の」にならずに済んだ小桜平避難小屋

番茶の酔い？もいっぺんに醒めた恐怖の夜であった。

余談になるが、小桜の小屋といえば、今から6，7年前、OB 数人での恒例の春山合宿で、加賀禅定道を登り、奥長倉の小屋に泊まって2日目は小桜。ビール、ビールと言いながら小桜平に着いたが、小屋がどこにもない。屋根まですっぽり雪に埋もれているとは想定外で、テントも持たないぼくたちは、仕方なく下山。6時には下りられたものの、山を甘く見た反省しきりの山行であった。

老いのチョンボ

１５期　舟田　節子

（内容は『ネパール展始末記』最終章、「おまけのゴタゴタ話」の続編です。会報発行が延期になったことで、その後をお伝えできることになりました。ページ占有が申し訳ないですけれど、ＯＢならこそ読めるとっておきの話です。）

「うん？あれ？何これ！ここの３行まるで一緒だよ！」

それは越前海岸の高須山に向かう途中の車の中。平成２０年１月２０日のことだった。ちょっとした勘違いで日曜日がフリーになった舟田夫婦は「越前海岸へ水仙を見に行こう」「ついでに近くの山に登ってこよう」と話がまとまり炬燵を抜け出した。そして越前海岸の山が紹介してあるガイド本２冊を選んでザックにほうりこみ、南下していたのだ。

なおも２冊の照合を続ける。３行だけではない。福井Ｓ会の『新・登ってみねの福井の山』のガイド文から個人感想部を除き、『旧版分県ガイド　福井県の山』から導入部を外せば、ガイド文の８割方が同じだった。

『新・登ってみねの福井の山』は平成４年４月発行。そして『旧版分県ガイド　福井県の山』は平成８年７月の発行で、あの著名なＭ氏が担当している。その人が盗作？

高須山だけを、調査の手が回らなくなった結果やむなく引用したのだろうか？しかし、飯降山、吉野ガ岳、権現山…ことごとく同じだ！ドッキン、ドッキン、鼓動が激しくなる。

こんなことって…誰も気付かなかったのだろうか。私はともかくとして、福井の誰も、そして盗作された福井Ｓ会も気付かなかったのだろうか？！

私は『分県ガイド　石川県の山』の共著者になってからも、他の人はどう書いているかと気になって、同種ガイドを買ったり、立ち読みしたりしたゾ。どのコースを紹介しているのか、表現に苦労した所はどう書いているのか、気になったゾ。そして他人はともかく、自分が書いた物はちょっとアレンジしてあっても気付くものだ。

ここまで丸写しなのに、「自分の書いたのと同じじゃないか！」と誰一人言い立てなかったのか？！

夫にも「見て、見て」をやると「こりゃあ、ひどいわ」と見比べていたが、「そんな気持ち悪いもん、ほかっとけや」と言った。

翌日も気になってたまらず、２冊を並べる。そしてまったく同じ場合は赤ペン、杉林がスギ林とか、２文が接続詞で１文になったり、その反対であったりを青ペンと分け、傍線を引いていった。三の峰、荒島岳、赤兎山などの書くことのある有名山数山を除いた、ほとんどのページが傍線で埋まってしまった。

これは犯罪だ。

ほんとにほんとに誰も言わなかったのか？それとも私が巻き込まれているカリスマ老害のように、圧力がかかって封じられたのか？誰もが目をつぶる状態になっているのか？

１月２４日、巻末を見て福井Ｓ会編集責任者に電話をかけた。自分は『分県ガイド石川県の山』の共著者の舟田だと名乗った。

「丸写しをされているようです。あるいは断り書きがなくても、口頭で使わせて頂くとＭ氏から話があったのでしょうか」

彼は福井弁丸出しで、まずムッとしたように答えた。

「わしらは自分達で調べて書いとるから、他の本なんて真似たことはない。だから見比べたこともない」

「そんなことは初耳や。これまでには『絵地図を看板に使わせてほしい』の連絡をもらって、『使って頂けるのは光栄。どうぞ』と返事したことはあるが…。Ｍさんからは聞いていない。わしはＭさんは知っとるし、話をしたこともあるが、あのＭさんがかいね…」

と絶句。

「わしらも調べてまとめるのは大変やった。ほやからＹ社の話を聞いた時には、Ｍさん一

人でできるがかいなとも思うた。そやけど、買ってきてまで比べようなんて思わんかった。図書館へ行って調べてみるわ」
翌日私は、特に丸写しのひどかった１０山あまりをコピーして送った。これへの返事はなかった。

一方私は去る１１月末にＹ社に問い合わせを出していた。
「自分は新・旧２版の分県ガイドの共著者。新版では最多コースを担当し、掲載写真も最多を担当の立場で問い合わせている。実は当会はＨ氏の退会により一年前に分裂している。経緯上こちらが会名を踏襲し、執筆割合もこちらが70％を占めることになる。分県ガイドにはどのような契約書が交わされているのかを伺いたい」

他の２名はとっくに諦めていたようだった。私は、戦いもしないで、みすみす名前をすり替えられるようなことは受け入れられない。下請けといっても、誠意も時間もかけたのだ。削るなら文章も写真も一新せよを主張するつもりだった。それにはまず契約書を確かめなければならない。まさか、「エベレスト見に行くモン！」の出版契約体験が、こんな場面に生きるとは思わなかった。しかし自分はＨ氏に対抗できる実質キャリアを持たない。返事は期待できなかった。
それなのに１０日後、メールが来た。「事実関係のみですが①出版契約は結ばれていない②Ｈ氏個人に支払いは行われた　　以上です」
感謝とともに「今後のこともあるので、文書回答をお願いしたい」と返信した。それへの返事はなかった。
こんな内紛で、しかも相手は圧倒的キャリアのＨ氏。誠意も時間も吸い取られて、それが相手の箔になって返される。そうやって会の実績を独占してこられたから、彼は横暴をやめない。どんな卑怯をやっても彼が優勢になる。パワーハランスメントが行われても、それが外へは正当で通っていく。山でこんなことが行われるなんて…。
しかし紙爆弾が落とされるたび、私達は結束し心を通わせることができた。自分にとっての山とは、仲間とはを問い直すことができた。協力しあっての会報新生１号の完成が近かった。それでよしとしなければならないのだろう…。
そんな時の、隣県の盗作発見だった。

翌週さらに越前海岸の金毘羅山に登りに行った。そこが一番丸写しがひどかったからだ。そしてもっとひどい事実を知ることになった。
真似られた本が所用時間を反対に掲載しており、そのまま盗用されていた。４枚の写真は車から撮れる範囲のもので、本来なら優先となるはずの頂上の金毘羅宮、頂上付近から見える海岸風景の写真がなかった。Ｍ氏は登っていない！だからガイドは誤植込みで丸写しになったのだ。ひどい！
調査して最新情報を載せるのがガイド本の契約。そのことで著作料は払われ、読者も代価を払う。信じて登る不特定多数の読者がいる。その人達の命がかかっている。
しかも…Ｍ氏は単に隣県のトップであっただけではなく、Ｈ氏を日本山岳会に推挙した恩人だった。

これで勝てる！老害の動かぬ証拠をつきつけられる。山の神様はいらっしゃるのだ！山を人の欲で汚すな…と、そうおっしゃっている！
Ｙ社に盗作を知らせるキーを打つ手がまさに震えた。すぐ「被盗作本をお貸し頂けるでしょうか」のメールが来た。
そして翌日には疲れた声での電話が入った。
「Ｙ社のＡです。盗作でした。新版も旧版を引用していますので盗作となりました。あのＭさんが…なんでこんなことを…」続いて
「実は分県ガイドは重版の予定です。文書回答ということではなく、共著者各自と個別に契約をするということでよろしいでしょうか」
夢心地で受話器をおいた。

こんな展開になるとは…シナリオだってこんなにうまく書けやしない！出版以来、盗作に気付いた人は大勢いたはずなのだ。それなのに誰も通報しないし、できなかったのだ。両本とも絶版になり、もう埋もれてしまう事実だったのに、今頃私の前に転がりでてきた…。

１月20日がフリーになった勘違い。たまたま手にした２冊。Ｙ社と先にコンタクトをとっていたこと。そして分裂前なら、私がＭ氏の盗作を告発できるはずがなかった。どれが欠けても、埋もれたままで終わる盗作だった。

きっと山の神様は「正せ」とおっしゃっているのだ。私が巻き込まれた騒動さえも、このために…。（どう非科学的と思われようと、そうとしかいえないのです。そう流れていったことが、今でも信じられません）

私の足は次に新聞社に向かった。

この事件の当事者は、福井Ｓ会と、Ｙ社と、Ｍ氏であって、私ではない。しかし今マスコミを賑わせている食品疑装のように、道義的責任は問われるべきだ。一般大衆が本を信じて買っている。隠蔽して済むことではない。

そうすることで、間接的に横暴へのパンチを食わせられる。動かぬ証拠を手にした今しか、反撃できるはずがなかった。反撃とは、Ｈ氏が潰そうとし、ガイド本著者からも外そうとかかっている私の名前、著者舟田節子を、前面に出すことだった。神様がここまで応援してくださっているのだと、躊躇なく応接室に座り、２冊を並べた。

福井Ｓ会は取材を断り、Ｙ社はノーコメントを通し、Ｍ氏が認めて（担当記者は「まるで罪の意識がないというか、あっさり認めましたね」と資料返本時に言った）事実確認ができたとして、大きく扱われる記事になった。（Ｙ社には取材が行く旨伝えてあった）

その後もＨ氏の紙爆弾は続き、その中で私は「ひとでなし」と罵倒されている。当方の会長には「Ｍ氏に謝りに行け」の「汚された会名に未練はないので賞状をとりに来い」の、「Ｙ社と新聞社には抗議文を送っておいた」の、「第２次○○会を名乗ることを断行する」のなどが送付されている。「ほうっておこう」と誰も返答してはいない。

その紙爆弾から、Ｍ氏が「末尾に福井Ｓ会の協力を得たことを書き記したが、編集の段階で抜けた。校正の時に気付かなかったのは私のミス」と答弁しているらしきを知った。当事者間

北陸中日新聞　2008年(平成20年)2月9日(土曜日)

地元出版本と文章そっくり

山と渓谷社「福井県の山」

旧版、10以上の山　執筆者「参考に」

山と渓谷社（東京）発行の「分県登山ガイド　福井県の山」の旧版（一九九六年、絶版）に、福井山歩会発行の「新・登ってみねの福井の山」（九二年）と酷似した文章があることが分かった。二〇〇七年発行の新版にも、やや似ている文章が一部残っている。「分県登山ガイド　福井県の山」執筆者の日本山岳会福井支部長(七〇)は「参考にした。盗作したつもりはないが、軽率だった。新版は問題ないと思っている」と話している。

「石川県の山」（山と渓谷社）の著者の一人、舟田節子さんが指摘した。旧版、新版とも参考文献、引用文献の記載はない。

旧版では福井県内の五十二の山を紹介。うち、十以上の山の記事に「新・登って―」の記述と似ている文が掲載されていた。福井市にある金比羅山（こんぴらさん）では、約五十行の記事のうち約三十行がほぼ同じ文章になっている。

また、舟田さんによると、「新・登って―」で誤っていたコースの所要時間が、旧版で同様に記載されているという。

新版は旧版と一部の山を入れ替え、計五十四を紹介。一部に「この先はなだらかな尾根が頂まで続き、のびのびと歩ける気持ちのよい道である」など、「新・登って―」と同じ形容詞が同じ並びで出てくる文章がある。

支部長は「正確を期そうと参考にした。その上で、自分が二度も三度もその山を歩いて文章を書いた」と説明。

福井山歩会の執筆者は「古い本なので事を荒立てたくない」と話している。

他のガイド本と酷似した記述があった「福井県の山」（右が旧版）

で、そのようにご老体の名誉を守り、著作料や違約金のやり取りが行われ、解決されたのだろう。

Ｙ社からは「５月中旬には書式が上がってくるので、個別に契約を進める」「当方はＨさんはＨさん、舟田さんは舟田さんで話を進めていく」「分県シリースは大切にしていきたい本なので、今後もきちんとお願いしていきたいと思っている」との電話があった。世代交代の時期がきていることをＹ社も察知しているのだ。

戦いぬいた自分を誉めたい時間が流れたあとに、ああそうだったのか…の霧が晴れていくような時間に浸っている。

全県を網羅した分県シリーズは、Ｙ社の発行本の中でもきわめて「社会性」のある書籍で、その著者になれることは、いわば山家の勲章なのだ。Ｈ氏の業績なくして受けることはなかった。すみやかな世代交替も可能だったのに、みっともない世代交替になってしまった…。

しかし、このトラブルがあるまで、自分は山に行ければよいで登っていた。周りともあたりさわりなく付き合っていた。紙爆弾が投げ込まれるたび結束し、自分にとっての山とは、仲間とはを真剣に考えた。すんなり世代交替が進むより、これらが実は必要なことだったのかもしれない…。

「すみやかな交替」など思い入れ強いＨ氏にはどだい無理なことで、こんな修羅場も結局は通らざるをえなかったのかもしれない。Ｙ社という外部が私達を認めるという出方をしてこなければ、到底受け入れられない（本人はまだ受け入れてはいない）ことであったのかもしれない。

個別契約が済めば、70％を占める私達が有利に立てる。それからなら、みっともない本にはならないようにの歩み寄りがやれるかもしれないが…壊れていく（？）時計の進み方はわからない。

老いのチョンボ…今回の特集名から表題としてみた。他人事ではない。これから自分だってどんな老いに直面していくのかはわからない。健康面の不安はもちろんだが、「頑張る」が権勢欲につながり、周囲に迷惑をかけたり、次世代を潰す行為に走ることであるなら、何事もほどほどがよさそうだ。

９年前発行のやまざと１５号の特集「山の語り部に聞く」のＨ氏の項の最後…

さてＨさんには、いやＨさんなれこそ、これから「老い」へのチャレンジが始まる。（中略）彼のチャレンジに同行しつつ、「その後」のインタビューも心に秘めて、人生を味わっていきたい。

それはおべんちゃらでもなく、当時の本心だった。しかし、Ｈ氏は自ら退会宣言前の５月、突然副会長３名を指名した。その一人の私には面前であたかも会員名簿を委ねるふうに大封筒を渡したのだが、実際の中身は新聞掲載用の原稿３本のつき返しで、罵倒文が添えられていた。つまりはどうなるのかと、解散しがたい会員達に「おい、原稿書かんか？なに、簡単やわいや。手伝ってやるし」と、にやにやと声を掛けまわっているＨ氏の姿があった。

そうやれば尻尾を巻いてくるかと様子を見た３ヵ月後に、それなら一挙に踏絵をさせるとばかりのボス退会、新会設立が起こったのだ。もうかつてのように自費出版団体ではなく、Ｙ社から受託を受ける団体に昇格できていたのに、それを忘れて、単に改称したで通ると世間や私達を甘くみたのだ。

たぶん、やはり彼は父親に継ぐ私の師といえる人なのだろう、晩年も含めて…。それこそ身を挺して、「老い」を教えてくれたのだろう。

今はそう書き留めるしかない…。

今でも忘れられない私のチョンボ

22期　森　恵利子

それは１年の終わり頃だったと思う。白山の御前峰に立つはずのPWだった。白峰まで着いたところで、おなべのふたがないことがわかった。私のチョンボだった。

民家の玄関先にリュックを積み上げさせて頂いて、翌日、出直すことになった。しかし、翌日行ってみると、なんと私のリュックが忽然と消えていたのである。一番上に積み上げられていた、まだきれいでコンパクトなキスリング。中には、みんなの残金まで入れたままだった。

「誰かが来て持っていった・・・。仲間の人かと思った。」申し訳なさそうにおっしゃる、屋根を貸してくださったおうちの方を責められるはずもなかった。自分を悔やむばかりだった。

警察にも行ったと思うが見つからなかった。山行も当然取りやめ。悲しい悲しい帰り道だった。

後日、１年上の学年の升田さんが、困っとるやろうとキスリングなど一式をくださった。私のキスリングはその日からＭサイズのものになった。パッキングは難しく、かつぎにくいこともあった。でも、ほんとうにほんとうに助かりました。

みんな、ほんとにごめんなさい。そして、たすけてくださってありがとうございました。

その他にも，秋の医王山、上高地・・・と、書ききれないくらいのチョンボがありました・・・。当時のみんな、ごめん。改めてお詫びします。

チョンボしなくてよかったこと　～頂上目前の下山～

26期　畠山　潤

雪山でテントを忘れたり、標高差３００ｍを滑落したり、現役時代は遭難一歩手前のチョンボもありましたが、判断ミスしなくて良かったと今でも思うのは３年の春山合宿で笈ヶ岳を目指した時です。

アタック前日の吹雪で１ｍ近い降雪がありましたが、当日は寒気が残って風が強かったものの快晴。チーフリーダーだったボクは頂上に行きたいと思いつつ、何でこんなに天気が良いのに頂上に向かわないのかとのメンバーの視線を感じつつ、雪崩の恐れがあるとして大笠山に登っただけで引き返したのでした。

あれから４半世紀近く経って数々の雪山経験を積んだ今は、あの時行かなくて良かったと断言できます。

ただ、今やっている単独の山スキーだったら、雪をなだめながら、安定したルートを探りながらして登っているでしょうね。笈ヶ岳頂上から千丈平への北面の滑降はそれだけの魅力があります。チョンボしなくて良かった、という思い出です。

新宿駅まで乗り越したリーダーの山靴

20期　久富　象二

１年生の時の夏合宿。南アルプスの北部、甲斐駒ケ岳や北岳をメインとするコース。初日は電車で金沢から甲府へ。最初空いていた電車は途中ひどく混んできた。朝早かったため皆寝入ってしまった。慌てて降りたった甲府駅の惨状。紛失物、リーダーの山靴、鍋類、コッフェル。電車の終着駅、新宿からは幸いに山靴が戻ってきた。鍋類の買出しのため、小雨降る甲府で沈殿。行動計画に基づいてこの時点で甲斐駒はカット。以来、私は現在まで甲斐駒には登っていない。

ポールを忘れたこと、そして最大のチョンボは…

43期　杉村　明慶

２回生のときの合宿で、ポールを忘れたことがあります。

自分にとって、ワンゲルとは何か…。今でも時たま考えることです。私の場合、卒業後２、３年のときに氷見にＯＢとして集まりに行った機会があり、このとき、初めて自分にとってワンゲルとは何かが少しはっきりしました。つまり間をあけて再び参加し、初めて分かったことがあったのです。

時間が経たないと分からなかったこと…、これも、チョンボかな……。

■うれしいホット・ニュース■

12期大出松世さんが会長を務める「石川県・金沢女性理科研究会」、

第39回中日教育賞を受賞 ―子どもたちの可能性信じて―

07.10.22
北陸中日

「子どもが創る理科・生活科」の授業実践研究

石川県・金沢女性理科研究会

男性教諭に任せがちだった理科の授業づくりを率先していこうと、数人の女性教諭が集まり一九七八（昭和五十三）年に研究会を設立。現在は金沢市や市近郊で勤務する小学教諭四十八人が「理科や生活科が大好きな子どもを育てたい」と授業研究に打ち込む。

教諭同士厳しい指摘

月一回の定例会では授業案の構成や子どもから答えを引き出す問い掛けの仕方、評価方法など会員同士できめ細かく問題点を洗い出す。厳しい指摘はしょっちゅうだが学びの姿勢は誇りの一つ。大出松世会長（金沢市立西小学校長）は「揺るぎない信頼関係がある。厳しいからこそ、ここまで続いたのでしょう」と話す。

会員は、勤務校で指導的な立場についたり、県内の授業で使われる学習帳の編集に携わったりと活躍の幅を広げてきた。大出会長は「それぞれの学校や地域で理科、生活科の教育向上に貢献していきたい」と意気込む。

今だから笑える30年前のチョンボ

23期　鳥越伸博

1.　テントのグランシ（グランドシート）を忘れたこと

奈良へロードに行ったときのこと。初日のテン場について、さあテント設営。テントを出して、ポールを出して、グランシを出して…。
「オーイ、早くグランシ出せよ。」
「…。」
「グランシは？」
「忘れたみたいです…。」
たまたまその時はフライシートを持っていったので、フライをグランシ替わりに使って何とか４日間凌ぎました。
ロードだったのと４日間１回も雨が降らなかったのが幸運でした。

◆◆◆

2. 途中でポールを１本なくしたこと

夏合宿も終盤戦、７泊目か８泊目のテン場についてテント設営をしようとしたときの事。いつもの通りテントを建てていくと、ポールが１本足りない。そんなはずがないだろうと確認するがやっぱり１本足りない。途中で落としたかもと少し捜しに戻るが見当たらない。しょうがないので食缶をポールの足りない部分の代わりにして、テントを建てました。
格好悪いので、リーダー側の入り口は絶対に開けないことにしました。

◆◆◆

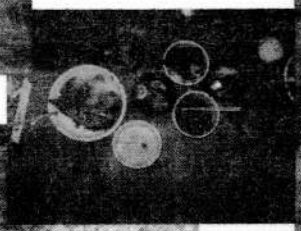
3. 山靴を持ってくるのを忘れたこと

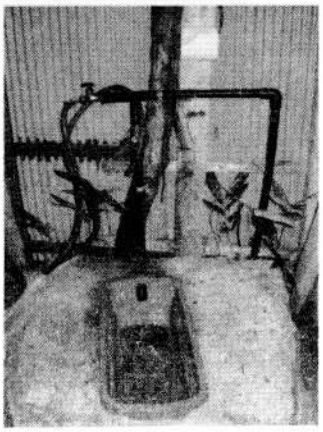
ゴールデンウィーク、残雪の犀奥ＰＷ。部室を車で出発して、鶴来を過ぎて内尾（今のセイモアスキー場）まで。ザックを降ろして、山靴に履き替えて、さあスタートしようとしたその瞬間。
「部室に山靴忘れた！」
なんとリーダーが山靴を忘れてきてしまったのです。連絡先の人間に電話して山靴を持ってきてもらって１～２時間遅れで何とか出発できました。ちなみにこのＰＷのリーダーは自分です。

目で見るベルクハイム

——植生、食生、食のその後を探る——

11期　加藤忠好





ベルクハイムに
水洗トイレ!?
昔は、ぼっとんに
カマドウマ。
トイレに行くのが恐怖だった…。

どんなに遠くにいても

キミのことば

聞こえているよ。

おちさん
越智山(福井県)

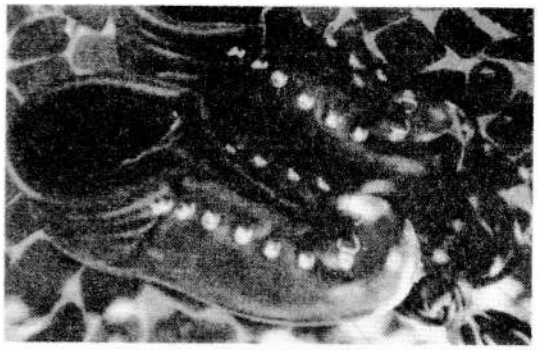
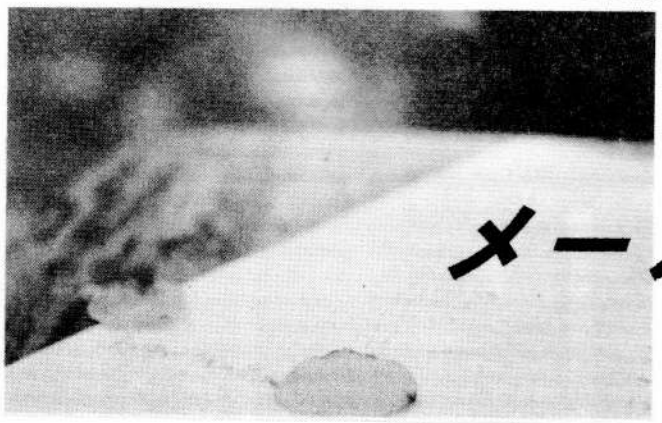


photo 21期 大野直子



メール宅急便
「寄稿」

東京マラソンを走るの記！

6期　合津　尚

2007年2月18日は夜間から風雨が強くなり、マラソンには最悪のコンデションになった。都庁前の広場に集合した3万人のクレージーな集団は、それにもかかわらず雨に打たれながら寒さの中で、裸同然のスタイルで約1時間近くもスタートの号砲を待ち続けた。これにはそう簡単には引き下がれない背景があった。

そう、昨年の8月に申込書を発送、10 月の抽選で3倍近い倍率を潜り抜け1万円の参加費を払い、その後の各人の特訓を経てこの記念すべき第一回大会の場に立っているのだから。

どうしてこうも最近は走ることがブームなのか、単なるメタボとかの対策でこんな苦労をする必要がないと思うが。理屈はともかく山と同じで、そこに42KMが横たわっているからか、これを走れる能力を自分と外部に誇示できるからかもしれない。

山にもそれなりの装備と経験・登り方などのノウハウが必要だが、マラソンも同様でシューズ・服装の選択とか食事・トイレの問題や走り方などのノウハウがある。

長時間走る場合に発生するトラブルとして、摩擦による足のマメ・股や腋の下の皮膚の破損や空腹・脱水症状からトイレの問題は深刻だ。それから最悪なのは体内に疲労物質が徐々に蓄積して、35KM あたりから体が動かないとか筋肉が痙攣するとかの極限状態となる。こうした障害(これをカベという)を乗りきるにはひたすら日頃走り込む(月に200から300KMぐらい)ことと、ペース配分で疲労の蓄積を防止すること。

さて前置きはこれくらいにして、どんな風に走つたか？

先ず長蛇の列のトイレをクリアーして、荷物を早々に預けたので直前のオニギリを食すことが出来ず、ランニングとハンツの裸同然で雨中で待つこと 50 分の苦行。走るペースはキロ5分 30 秒見当で4時間を目標として走りだした。なにしろ3万人が川の流れのように動き出したが、速度に差があり思うように動けず、やっと神田あたりでペースに乗った。それから日比谷を過ぎて品川までは追い風だが長かった。やっと品川駅から折返しになったが、ここからが雨風をまともに正面に受けるアゲンスト状態で体力の消耗が徐々に進行する。日比谷から普段は歩けない銀座通りに出て中間点で、フルの半分のハーフで1時間 55 分といつもより少し遅いペースだがまずまず。

この辺から雨の中だが大変な観衆の声援、中央通りから日本橋を過ぎて浅草・雷門から折返して、再び銀座から築地をすぎていよいよ 35KM あたり。辛いことにちょうど佃大橋の上り坂が延々と続き、ついにガス欠状態になってしまった。キロ当り2分近いロスが5キロ以上続きこれが致命傷になった。残り2キロでバナナと水を補給したが時すでに遅し。4時間 10 分で 19,500 人の男子中 7,600 番で終了した。

これから1ケ月後の荒川マラソンという1万人以上集まる大会があって、ここでは4時間を切って、なんとなく幸せな気分で日々を過ごしているビョーキの年寄りでした。

ネパール展始末記

15期　舟田　節子

「エベレスト見に行くモン！」の出版と、「ネパール大好き仲間展」開催の予告をワンゲル会報に出したのは丁度一年前のこと…というより、この予告のために、開催期日や内容が一挙に決まり、企画はスタートとなりました。

本を出版するに至った経緯は後回しにして、出版したら売らねばなりません。売らねばというよりまず世間（少なくとも金沢、石川県）にアピールしなければなりません。どうやって？の時に、塾の予習として開いた新・中３英語教科書の見開きカラーページが、丁度ネパール特集でした。従来国際援助活動紹介といえばアフリカが相場でしたが、今、時代の目はより身近なアジアに向き始めています。そして、金沢スタンダードという教育特区施策は、英語指導の半年前倒しをスローガンとしていますが、教科書改訂時はに前倒し供用ができないため、かえって半年遅れて、新版教科はこの秋配布されたばかりでした。これは千載一遇のチャンス！

というのは、会計を任された石川ネパール協会というのが、（それも、会長は高校の英語科恩師、事務局長が高校の同級生というご縁で断れなかった話）とんと活動をしておらず、年会費もろくに入ってこないという状況にありました。何かを企画して、その連絡で年会費のことも思い出して頂くとしないと、存続は風前のともし火です。そもそも会というのは会費集金のためでなく、何かやりたいことがあって発足した筈なのに、何か（規約によれば、ネパールとの親睦・交流を推進し紹介していく）をやりたかった発起人達は誰も出てこないという、これまた不思議な会でした。不審がりながらも、半端な責任感と義侠心でずるずる穴埋めをやっているうち（どうも私のビョーキ）、お鉢が回ってきて「何かをやらねば…」に至っているのでした。

塾業のおかげでメディアミックスという手法は身についてしまっていました。宣伝活動とは相乗効果なのです。各種メディアを同時に使い、個々と全体の双方で動いてやっと効果が出てきます。せっかく時間を使うのであれば、「出版」と「ネパール協会」と「ワンゲルＯＢ」と、全部からめてしまう（＝面倒をかける？）という「壮大な」企画書が、ここに産声をあげたのです。

◆出版という自己実現

動機は後回しにして、応募してみたのは、いわゆる「あなたの原稿を募集します」という、出版社の小遣い稼ぎ企画です。かたや活字離れと出版不況、かたや「私だって」の自己実現願望…ここに自費出版をもう少しリボン装飾したような小規模出版ビジネスが出現することになります。

そうとわかってはいましたが、私を動かしたのは、原稿をかなり読み込んだとわかる感想文（その気にさせるプロですから当然）がついていたのと、「編集者がつきプロとして、原石を書店に並ぶまでの宝石に磨き上げる」「全国の

提携書店に必ず並ぶ。当社の流通ルートに載せる」（自費出版は、書店へ個人で頼みに行かなければならず流通ルートがありません）の提示条件でした。もっと文章修業をして、これぞの自信作（いつ？）ができてからよりは、今回を授業料とした方が、一番の勉強になる！と考えました。（走ってから考える人！）

今後こんな自己実現をされたい方のために、金額をご披露しましょう。全体ページ数、カラーページ数、写真・図版数などで当然変わってくる数字ですが、より簡易出版をめざす部門が独立したばかりのキャンペーン中で、経験者からは「安い方」と言われた数字です。 500部印刷、55書店に配布で 112万円。 800部印刷、 300書店に配布で 230万円。原版制作料は一緒なのですから、書店配布にどれだけとられるものかということです。無名作家が電撃デビューなど宝籤なみの話で、素人本は場所塞ぎをやっているだけ…だから場所代をとられるのです。さらに終盤には、「当社は流通ルートに載せるまで。書店のどこに置くか、いつまで店頭に実際置くのかは、あくまで書店側の裁量です」と通告されました…（やっぱりね）。それも、先に知ってよかった勉強です。印税など涙のような金額。そして１年の契約が過ぎれば回収され、無料で返本されてきます。つまり経費は場所代や手数料がメインになるのです。

私が契約したのは 500部。そして、３月１日発行日の前に、全国書店配布分を除き完配できてしまいました。配ったのと、売れたのが半分ずつ…。知人社長から 100部注文などが入ったお陰です。ここらで満足が分相応の青い鳥とわきまえて、増刷（自費増刷を意味します）を断りました。

今私の手元にも１冊しか残っていません。もし来年、全国書店配布分が返本されてきたなら、残りの知人に配り、さらに残れば図書館に寄贈して、夢の終了とするつもりでいます。

◆ネパール展

「石川ネパール協会」とは任意団体です。年度末には、団体規約、役員名簿、今年度活動記録と決算、来年度活動予定と予算を届け出ます。すると次年度、行政からの名義後援を受けたり、助成金を申請・受給できる団体となります。ＮＰＯより格段に書類は少なく公開義務もありませんが、助成金額も少ないのです。ちなみに金沢市の場合、総額で90万円（漸減の予定）。１団体で10万円まででかつ、総支出の半額までが助成限度。連続受給もできません。そのうえ全体調整のため、年度末まで実際助成されるかはわかりません。これが県になると、草の根国際活動支援助成金の名となり、40万円を越える事業であることが加わります。ともに、助成項目と按分も定まっています。

つまり、任意団体の活動とは「時間も経費もボランティア」が大前提にあります。「公益性があるのなら、半額程度は援助してあげましょう」が助成金の立場です。より公益性がある活動に、より広く支援するために、年度末まで、当該事業が助成対象になるか否か、その額も決定できません…となるのです。

一方名義後援の方は、とるのはタダですが、それぞれへの申請が必要です。引継ぎは残金だけ。様式書類があるとの申し送りも受けてはいませんでした。「どうすればいいんですか」「教えて下さい」「どうしたら通るんですか」を窓口で繰り返しました。クレームもヒントも小出し…民間サービス業には考えられない意地悪さと、非能率に耐えました。日参を重ねて、まずネパール大使館からの名義後援をとること。そうすれば日本のお役所はすべて国際交流の見地から応援すべきとなって、ぞろぞろ後援する側に回ることがわかりました。そうやってネパール大使館、（財）石川県国際交流協会、金沢国際交流財団、金沢市教育委員会、石川県、金沢市、北国新聞社、テレビ金沢、エフエム石川、企業ではアルパインツアーサービス㈱、学習

北國新聞　2007年（平成19年）3月11日（日曜日）

「ネパールについて知ろう」

石川の協会13日から企画展

並木町の子ども招待

民族衣装や民族楽器などの展示品を準備する石川ネパール協会の会員＝金沢市尾張町

石川ネパール協会は十三日からネパールの歴史や風土を紹介する初の企画展（本社後援）を開催する。十日までに「雪男の毛皮」のレプリカをはじめ、絵画や陶芸作品など約百点が県内各地の協会員から集まった。

企画展は金沢市並木町の浅の川画廊で「集まろう、そしてネパールについて知ろう」をテーマに開かれる。展示品は、協会員がネパールを訪問した旅で購入した品々でこれまで一堂に公開されることはなかった。会員が感動した風景を撮影した写真や民族楽器なども並べられる。

初日は地元並木町の子ども会を招き、同協会会員がパネル展示でネパールの自然や歴史について説明するほか、島崎四郎副会長が学校建設などの支援活動などについて講演する。

かな　2007年（平成19年）3月14日（水曜日）

「雪男の毛皮」レプリカなど展示

石川ネパール協会

石川ネパール協会の初の企画展「集まろうそしてネパールについて知ろう」（本社後援）は十三日、金沢市並木町の浅の川画廊で始まり、現地で伝わる「雪男の毛皮」のレプリカや民族楽器、ネパールの山々を撮影した写真などが来場者の関心を集めた。

同協会の会員がネパールの旅で集めた約百点が展示された。民族衣装を着た操り人形などの民芸品や仏画の曼荼羅（まんだら）などが並び、ネパールの文化を伝えている。

初日は地元並木町の児童十五人が招待され、協会員からネパールの自然や歴史についての説明を受けた。材木町小四年の吉田能英留君は「ネパールの山々は富士山より高い山ばかりで驚いた。ネパールに行ってみたくなった」と話した。展示は十八日まで。

ネパールの民族衣装や写真を眺める児童＝金沢市並木町の浅の川画廊

研究社㈱を後援として、ネパール展（Let's Get Together and Learn about Nepal）はゴーとなりました。

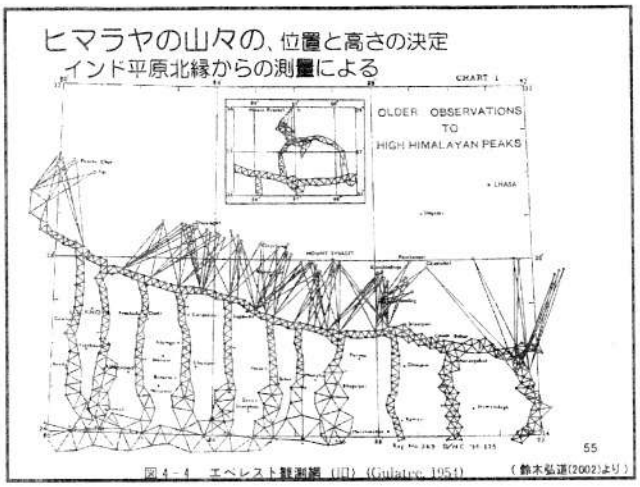
そのように最初は名義後援獲得だけに動いていました。ところが具体化するにつれ、出費が嵩むことが分かり、さらには助成金を頂く活動をしていなければ、行政の言う「活動」に該当しないこと、助成金申請と獲得の前例を重ねていかないと将来の活動が不利になることも分かってきました（この歳にして社会構造を知った…）。金沢市からの助成は、駆け込むような写真展企画で前年受給しており、使えるのは県の助成枠のみ。４０万円事業を考えなくてはならなくなりました…。またしても泥沼に填まった感覚…。しかも 100%算定とされる項目で金額を上げないと助成対象金額は上がりません。大きいのは講師謝礼、講師旅費の項目です。もとより帰省ついでにと長岡先輩にお願いしてあり、また、スケッチ展示をお願いしたトレッキング仲間にも、説明会を強要してしまいました。画廊の設営や、額縁貸し出しも義兄にボランティアをさせて…。ようするに、人脈、いかにホワイトリストを持っているか…にかかります。そしていっぱい借りを作ることにもなりました。今はそんなに頼める人がいたご縁と、協力に感謝でいっぱいです。

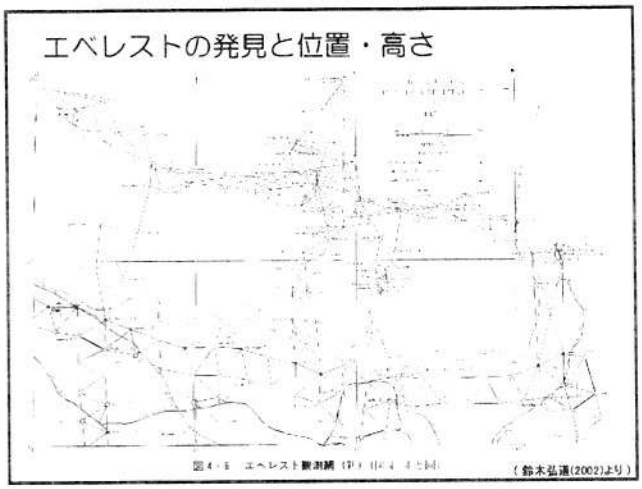
◆ワンゲル万歳！

特にワンゲルＯＢ関係者は協力が際立っていました。発案段階の、形になるかもわからない時に、即「いつまでにですか？」の答えや、ろくな説明もないのに「協力します」が返ってきたことには、今も感動を覚えます。

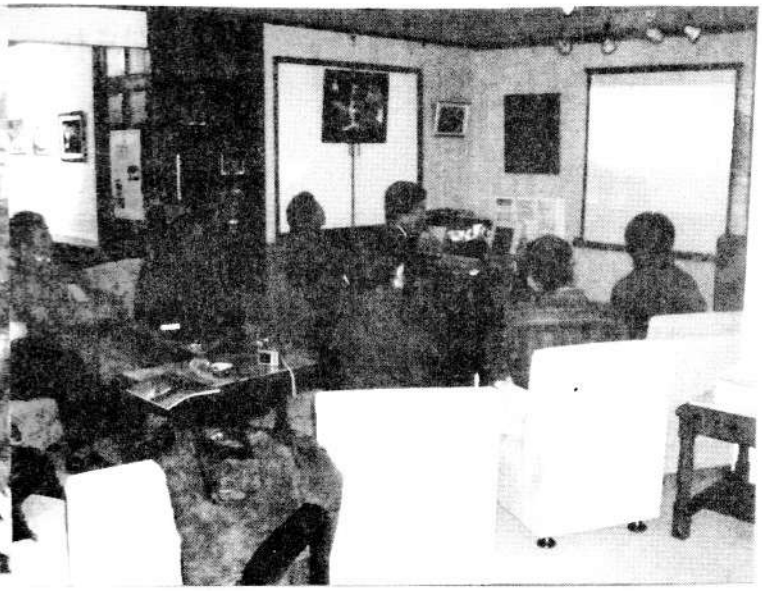
ワンゲル外の反応が悪すぎました…しかし、それが普通です。テント内で誰かが動いた時に、鍋をこぼすまいの手が何本も伸びる…そんなワンゲルの方が特別だと思います。とても安易

《長岡様講演スライド８０枚中の２枚》





《11期長岡正利様の講演》



《29期深井嘉浩様のトレッキング説明会》

にワンゲルＯＢまでからめてしまったのに…。

11期長岡正利様　３月17日（土）に、「ネパールヒマラヤの地図と山の高さ」をご講演頂きました。

・基礎知識：地図（地形図）の出来るまで
・各種地図とその利用
・山の高さ（標高）とは
・ヒマラヤの測量と地図、その山々の高さ
・立体視の愉しみ：地形や写真の立体視

また、関連文献や写真集も展示ご協力頂きました。観光ブームに湧く以前のネパールの物もあり、特に毎日グラフの「マナスル登頂記念号」は、熟年世代に好評でした。戦後日本が凝縮しているような報道誌でした。

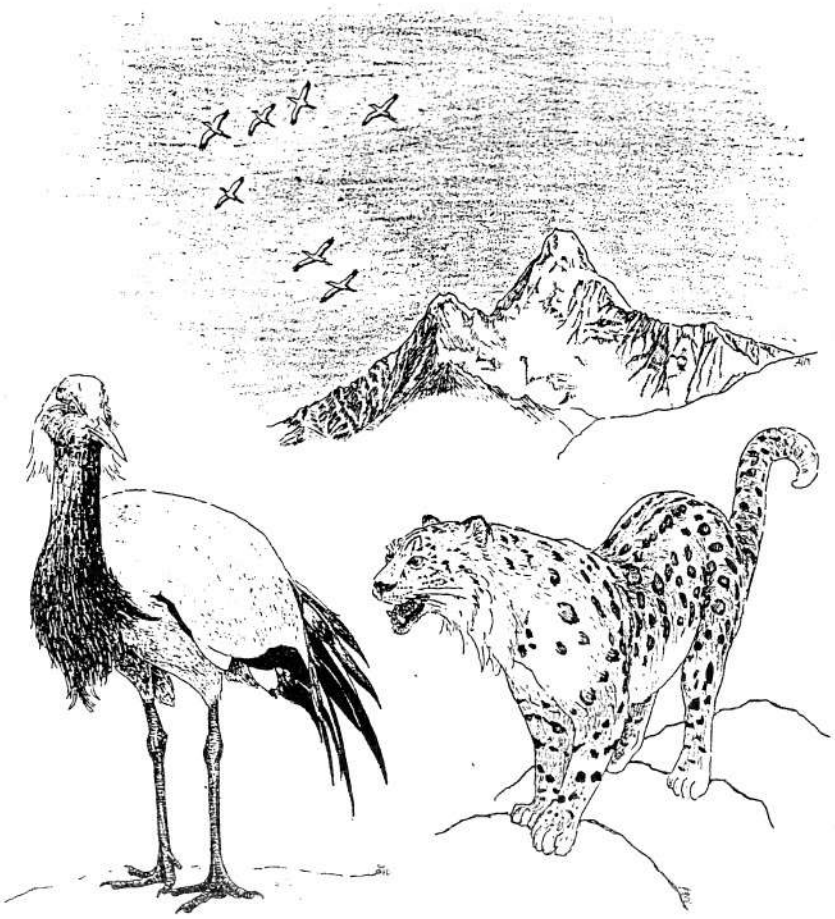
29期深井嘉浩様　春の説明会を利用したとはいえ、３月16日（金）と17日（土）に計６回もトレッキング説明会をして頂きました。勧誘用ならではの素晴らしい映像。いつものシチュエーションとは違ったことで、どなたかの夢につながったことと思います。皆様もどうぞお引き立て下さい。アドバイスはもとより、無理も聞いてもらえますので。

またネパールのＤＶＤもご提供頂きました。

20期中村元風様　連絡をすればさえ無理難題付きの先輩の私。プロだからと遠慮しているつもりで、ダメ元で迫ってしまう…。恐縮しているようで、反省なし。今回も快く出品をご承諾頂きました。ふるさと百名山の名前を変えれば既製で間に合うくらいで軽くお願いしたのに、

新作をご用意頂きました。ヒマラヤの空、岩、僧衣の色が、ふくら手の白網目の中に点在している花器です。その直前の東京での個展では好評の作品になったとのことで、安堵。無理難題をも創造につなげる姿勢にプロを感じました。（しかし展示責任までを深く考えていなかったので、会期中は結構ハラハラ）　会場にも奥様とお越し頂き、ありがとうございました。

21期竹中敏様　その前の本のイラストの時にもちょっとした思惑違いがあり、迷惑をかけてしまいました。ただもう謝るしかない私に「僕は頼まれると嬉しいんです」。スゴイ！そう言えるようになりたい！どれだけ時間のかかるイラストか…でも、性懲りもなくお願いして、皆さんにも見てもらいたいと思いました。描いてくれたのはアネハヅルとユキヒョウ。添付されたコメントを紹介しておきます。



・アネハヅル

世界最小のツルの一種で、北海道のタンチョウヅルの翼開長２ｍ以上に対して、このツルは成鳥になっても約46cm程度です。

繁殖期の春から秋にかけては、シベリアからロシア、中央アジアを経てモンゴルに達する広い地域に分布し、日本でもまれに観察されています。秋になると、チベット側からヒマラヤを越えて暖かいインドに渡ることで有名です。

ヒマラヤを越えるということは、8000m以上の高空を渡るということであり、アネハヅルはほぼ対流圏と成層圏との境目を飛行することになります。ヒマラヤの頂きは、常時氷点下20度以下、時には氷点下40度にもなり、風速50mの強風が吹き荒れる世界です。

アネハヅルの祖先たちは、ヒマラヤがまだ低かった時代からこの渡りの旅をしてきました。そしてインド半島に押されてヒマラヤがゆっくりと隆起し続け、標高8000m以上になった現在も、太古からそうしてきたように、ヒマラヤを越える旅を続けています。

ヒマラヤを越えるアネハヅルの群れには、羽を痛めたもの、子育て中のもの、春に生まれたばかりの幼鳥もいるのです。２kgあまりの小さいツルが、もっとちっちゃい幼鳥と共に、ヒマラヤを越えていく光景を思うと、「がんばれよ」と言いたくなります。

ユキヒョウ

中央アジアからチベット、ネパール、アフガニスタン、カシミール、ヒマラヤ山脈などの高原や山岳地帯に生息するネコ科の動物。標高2000～6000mの高地で過ごし、目撃例は数えるくらいと言われる伝説的な大型捕食動物です。獲物となるのは、アイベックス、アオヒツジ、ヒマラヤジャコウジカ、イノシシ、ウサギ、鳥類、時には家畜を襲うこともあり、自分より大きな動物を倒すこともあるそうです。

今なお、その美しい毛皮や漢方薬に利用するための密漁が絶えず、一時は1000頭にまで減少し、現在は絶滅危惧種として保護に力が注がれています。

最近はボランティアによる「ネパールのユキヒョウ」プロジェクト等の活動によって、その生態が解明されつつあります。

今、私たちがここに居るこの同じ時間に、ネパールの雪山のどこかに、獲物をねらっているユキヒョウが息をひそめていると思うと、胸が熱くなります。

15期奥名正啓様　同期のよしみで、私の空いている時間に合わせて（相当に我儘なことだと後で気付いた）来てもらい、プロジェクターと、パソコンをつないでもらいました。パソコンも１週間借り出しです。基本的なつなぎ方も、それがどう相性が悪いのかもわからないんだから…持ち帰ってもらい、調整してもらって、「他は触るな」で操作を伝授してもらいました。やはり、動画の時代。変化に富んだ展示構成とすることが出来ました。発案しても内部のフォロースタッフはゼロでしたから、そんな状況をカバーしてもらって感謝です。

15期上馬敏栄様　油絵２点と、ネパール民芸品（操り人形、ランタン、刺繍製品など）を展示ご協力いただきました。大量のパンの差し入れも、ありがとうございました。感動した景色を、描いてまた楽しむ…素敵です。将来ご主人との写真と油絵の二人展も、期待しています。

倉谷でお世話になっている山下様　「雪男の頭の皮」なるもののレプリカを用意しようと思いつきました。子供には受けるはずです。ゴワッとした素材。たしか「クマの毛皮ならいくらでもあげる」と、おっしゃっていたので、これも安易に頼んでしまいました。実は原皮は捨てるほどでも、なめせば大枚かかるそうでした。知らぬが仏でそれを頂いてしまい、いくらなんでも完全品に鋏をいれることは能わず。おまけのアナグマの方を、縫い合わせ、カラーリングして人形ケースに収めました。現地の風習と同じように置いた寄進箱には芳志が集まり、教育支援口座に収めました。

《ケース内が雪男の頭の皮レプリカ
実物（ようするに偽物）に、かなり近い》

◆総括

Ｂ２ポスターは50枚、Ａ４ポスターは 400枚案内はがきは2000枚を配布。名義後援をとったことで、教育委員会のメイルボックスが使えるようになり、市内小中学校、公民館宛てに一斉配布をすることも出来ました。

北国新聞には事前取材を含め、４度記事にしてもらいました。テレビ金沢、ケーブルテレビ、ＮＨＫテレビの３社に取材してもらいました（取材依頼をだし、電話でも確認した）。

ネパールティーを来場者全員にサービス。ダルバート（ネパール定食の豆スープ掛けご飯）は、知人に提供用として連日仕込み、ネパールのお香が漂い、ネパール音楽が流れる中で、召し上がって頂きました。

会期中約８００名にご入場を頂きましたが、ワンゲル関係では３期田村様、４期佐藤様、７期村田様、８期野村様、山村様、11期加藤様ご夫妻、13期辰野様ご夫妻、吉田様ご夫妻、15期上馬様ご夫妻、松林様、20期中村様ご夫妻にご観覧頂き、ご拝聴も頂きました。（漏れていたら、ゴメンナサイ）　そして助成金も申請通りに獲得し、活動実績を残すことが出来ました。

自分に何ができるか？のように始まり、あらゆるツテを使う…でチャレンジしたこの企画。こぼすに尽きない裏話も数々ながら、いかに自分が人とご縁に恵まれているかを知る機会になりました。

本を上梓したことを含め、期せずして人生55年を総括できたような平成18年度でした。この後披露するゴタゴタ話がなければ、本を出すことも、ネパール展を企画することもなかった…マイナスエネルギーをプラスエネルギーに変換せねばとした自分に拍手。そうさせてくれた人とご縁に、ただただ感謝です。

◆おまけのゴタゴタ話

「後回し」のフレーズを２回も使ってのゴタゴタ話…。これを出だしから書いたら「ワンゲルの皆さんのご協力に感謝」の趣旨がぼやけてしまいます。また、かつて「山の語り部特集」で紹介した責任から、その後を簡単に伝えておきたいと思います。

ようするに、私が25年所属してきた某山岳会は分裂しました。それは世間によくある話、また、外部から見れば単なる確執の、聞くに堪えない話です。老害…権威にしがみつくボスが、一番奉仕し、実力・人望ともある二番手を追い出しにかかり、それを庇った者を次々粛正。「会議メンバーから外す」「本の改訂時には名前を外す」「登山教室の助手から外す」「原画展は没にする」などなど。そう脅せば相手が折れてくると考えたようです。

あげく自分が退会して、新会を設立しました。新会登録とはボス個人への誓約書のようなもので、かつて改名の度そんな禊が行なわれたと今回聞きました。結果は、不信任投票がなされたようになりました。これまでトロイカのようにやってきた老分達、『40周年誌』編集の委員全員、親子白山登山引率リーダー全員、分県登山ガイド執筆者の５分の３（執筆率70％）といった、会の活動の中心者達が拒否。この事態収拾のために召集された緊急総会には、ボスだけが欠席し、誹謗文書を乱発。うやむや新会登録した側と登録しなかった側双方が、匙を投げたまま、それぞれに山を続けています。

本人が退会しても外部への窓口は元ボスです。紛らわしい会名にし、「会の仕事をあいつらが嫌がった為に分裂したのだ」と言い触らし、替わりはいくらでもいるとばかりに頑張っています。

既に提出してあった新聞掲載用原稿３本を罵倒言付きで返された所で、私はご縁を切りました。そして出版社の原稿募集に、手元にあったネパール紀行を送ってみたのです。上梓を地元新聞に載せ、地元のうつのみや・リブロ・紀伊国屋書店の店頭にも本を並べて、私なりの「清算」（？）を済ませました。

《７期村田様と11期加藤様ご夫妻》
《近畿ＯＢ会からの花束も、ありがとうございました》

もう過去のことになりました。私は筋を通した仲間達（成り行き上は、元の会名のままです。退会宣言文書を出したのはむこうですし、また、愛着あるであろう熟年会員達のために触らないことにしました）と山を愉しみ、ようやく金沢から出るようになったバス会社主催の百名山ツアーにも便乗しています。これまで、仕事と家庭を両立しての山は日帰り圏が主でしたし、それ以上に執筆調査と称して地元の山に長年縛られていました。

執筆で名が売れたのか？ガイド本著者などは、お金と時間の持ち出しの方が多い名誉職のようなものです。誠意を傾けた仕事を「逆らった。だから切る」で出てくるのであれば、恩も帳消し。せめて老いを憎んで人を憎まず。それぞれが自分の納得できる人生を生き、関わらないとすればよいのです。

「人はなぜ山に登るのか？どう山と関わり続けるのか？」

『エベレスト見にいくモン！』のトレッキングの時も、その答えを参加者達に求めていたように思います。

山は山であり続け、人はそこに勝手に喜怒哀楽を重ねます。

徐々にそれらは思い出となります。最後は思い出を肴に山仲間と飲んで、地上に受けた生命とご縁に感謝するのでしょう。「仲間がいるから山に登るのだ。仲間と生涯愉しみ、万物に感謝するために山と関わるのだ」が、私にはより見えてきた答えです。

そんな中で、ワンゲル仲間はやはり格別なのです！

田村大兄 雑感あれこれ

3期 田村 昭夫

田村さんは今でも、ノーベル賞に論文を送られているのだとか…。その飽くなき野望に乾杯！

公共学校に宗教教育を

田村 昭夫

「神心獣体」を目標とする青少年の教育をすべし。脳は精神の中枢ではなく内臓の奉仕器官に過ぎない。脳に一番似合はないのが知識教育である。脳に最も合うのが獣の様な体を作る教育である。そして神の様な心を持たせるには宗教教育しかない。脳の本来の役割は本能の維持調節機能である。これは人間であろうが獣であろうが虫や魚であろうが動物に共通するものである。人間は脳を間違って使用している最も劣等な生き物である。この世で万死に値する罪人が生存を許されるとしたら、宗教教育によって洗脳するしかない。神の奥義を知り、聖人達の生き方を学ぶことである。これを教育出来ない学校は廃校にすべし。

ドイツの高等学校「Gymnasium」は健康な体を作ることを第一目的とする。獣のような強い体を作り、その上に神の存在と神の心を知らせるのが教育の目的である。

「神心獣体」（後藤新平の書）

「健全な精神は健全な肉体に宿る」
（ギリシャの格言）

「脳は内臓の働きの支援器官に過ぎない。
知識や思考の為の器官にあらず」
（金大医学部名誉教授小林宣泰先生）

小林宣泰氏はKU卒業 三期卒

強きを助け、弱きを挫け

田村 昭夫

弱者を助けると弱者は図にのる。強者は滅ぼせないから強者なのだ。自然の摂理は強者に有利に弱者に不利に働く。弱者を助けることは自然の理に反することである。しかし弱者をいじめてはならぬ。弱者を勇気付けるのが強者の務めである。弱者自身はイジメられ強くなるべし、イジメられて自殺していたのではいくら生命があっても足りなかろう。社会人として生きると云うことはイジメられ強くなることに他ならない。動物は強い種を残すために雄は雌の獲得にシノギを削る。

人間は弱者でも種を残せるものだから、だんだんひ弱になってゆく。特にこの国はくたばり損いの老人ばかりとなり、働かない年金生活者達が国を滅ぼしつつある。医療施設機関は子供や青壮年の為に存在する筈なのに、くたばり損いの不労所得者層に食い物にされている。生産者人口は減る一方で、青少年には未来への展望はない。七十歳以上の医療機関の利用を禁止すべきである。代わりに安楽死を推奨すべし。生活保護や年金制度は廃止すべし。　老人達は若者達に寄生してはならない。自立せよ！

後世へのお返し

田村 昭夫

戦後六十二年我国は完全に滅亡した。社会組織は老朽化して、その機能が果たせなくなっているばかりか、組織そのものが害悪である。全ての組織を破壊して0からやり直してみてはどうか。「見直す」のではなく「壊す」のである。再生は既存の否定から起こる。戦中戦後を生きてきた私達が子孫代々に残すものは何もない。新しい芽を出しやすい様に六十二年前の日本の姿にもどして後世にお返しするのが我々の勤めである。車のない道路に戻して、人間の歩く本来の道にする。役人や政治屋を追放する。駐車場を畑にする。寝たきり老人を安楽死させる。殖えすぎた学校をつぶす。年金制度も廃止する。

新しい制度として大統領制を作る。農業立国として食料を自給出来る国とする。天皇制と大統領制は両立せぬと云う論は間違いである。天皇は象徴であるから首都は京都に返還するのが正しい。

大統領は強い権力をもつから独裁にならぬ為に有能な補佐官が必要となろう。

一国の最高指導者たる者の資格は「民の声」より「天の声」を聞き、死を恐れないことである。

「民の声」を聞くのは役人の仕事である。私は大統領に立候補する。志ある人は立候補せよ。

■2008年GW後半 5月3日～6日、3泊4日

11期・青柳健二

妙高・火打連峰スキーツアー

【スケジュール】

●5月3日（快晴）

８：３０　笹ヶ峰 1320 m出発　シールで涸沢から三田原山中腹を登る

１５：２０　大倉乗越からスキー滑走し黒沢池ヒュッテ 2020 m着

●5月4日（快晴）

8：２０　黒沢池ヒュッテ発　茶臼山を越え、シールにて火打山へ

１１：２０　火打山 2461 m登頂　360 度の絶景を眺め昼食

１２：００　火打山南東の大斜面をスキー滑降アッという間に高谷池東部 2000m 付近まで滑り降りる

１３：３０　再びシールを付け黒沢岳 2212 m登頂

１３：４５　黒沢池ヒュッテに向けスキー滑降

１４：０５　大滑降後、平地部を滑って歩き黒沢池ヒュッテ着

●5月5日（曇り後雨）

８：２０　黒沢池ヒュッテ発　霧で視界がない中を三田原山に向け登る

１０：４０　三田原山 2360 m登頂　目の前に妙高山の頂きがそびえる

１１：２０　昼食後、霧が巻くなかをスキー滑降

１１：５０　林間滑降と沢で開けた斜面を滑り降りると、目の前にヒュッテがあった

１２：３０　チョット物足りなく、ヒュッテ裏の大倉乗越 2140 mにスキーを担いで登る、一滑りで黒沢池ヒュッテ着

●5月6日（快晴）

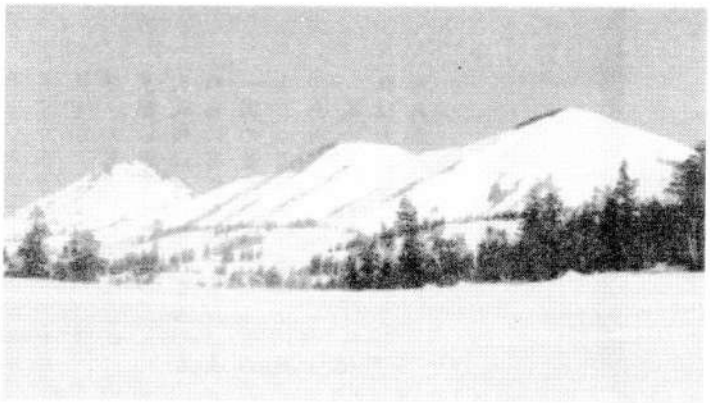
７：３０　ヒュッテ前で記念写真を撮った後、スキーを付けて帰途につく。黒沢をトラバースして三田原山中腹の林の中を滑り降りる

最後は登ってきた涸沢を、途中の３つの滝を避けながら滑り降り

９：４０　笹ヶ峰着、面白かった大満足のスキーツアーを終える

ブナ林の中を、シールを付けて登った

ドーム型の黒沢池ヒュッテと黒沢岳の朝



火打山は、山スキーのためにあるような山だ

ここ数年、５月の連休は、日帰りで山スキー（栂池、八方、立山、乗鞍等）を楽しんでいたが、自己流に満足できず、本格的な山スキーツアーを体験すべくガイド付き山スキーツアーに応募したのだ。

そのツアーは、日本アルペンスキー学校による妙高・火打連峰スキーツアー。私が大学時代のスキーブームを先導した、伝説の冒険スキーヤー植木毅氏が主催し、自らガイドを行っているツアーである。

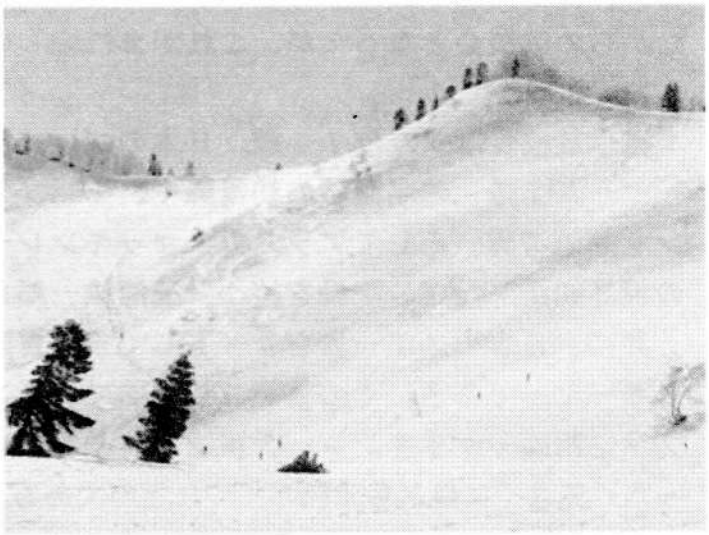
参加メンバーは、兵庫県の山スキークラブ「どんぐり」奥田リーダー他４名と私、他に同志社高校山岳部生６名と同行の先生４名がいたが、別行動であり、実質的には６名の参加メンバーに植木校長・コーチ数名という贅沢なツアーとなった（GW 前半の同ツアーは、２０名が参加したと聞くが)。

大学時代に保田リーダーのスキーＰＷで、シールを付けて登ったことはあったが、カカトの上がるビンヂングを付けた山スキー（レンタルで借りた）を付けて山を登り滑るのは初めてで、どうなることかと不安であった。しかし、天候とメンバー、そして何より植木校長の人柄のお陰で、予想以上に楽しいスキーツアーとなった。

初日の笹ヶ峰牧場から黒沢池ヒュッテまでのシール登行は、それは散々なものだった。何しろ実質初体験のシール登山、シロウトは私一人で、いつの間にか遅れる。林の中をジグザグに斜行しながら登るのだが、ターン時に足を滑らせ、急な斜面でズレ落ちて転ぶなど、思うように行かない。植木校長の長男氏には、息が切れ足が止まると「休むでない、少しずつでも足を前に」と怒鳴られ、ワンゲル新トレ以来４２年振りに、きついシゴキを受けている気分だった。

ただし、我輩の情けなさにしびれを切らした長男氏は、私のザックを取り上げて、身軽になってからは、シール登行の要領が解りだし、何とかヒュッテまで辿り着く事ができたのだった

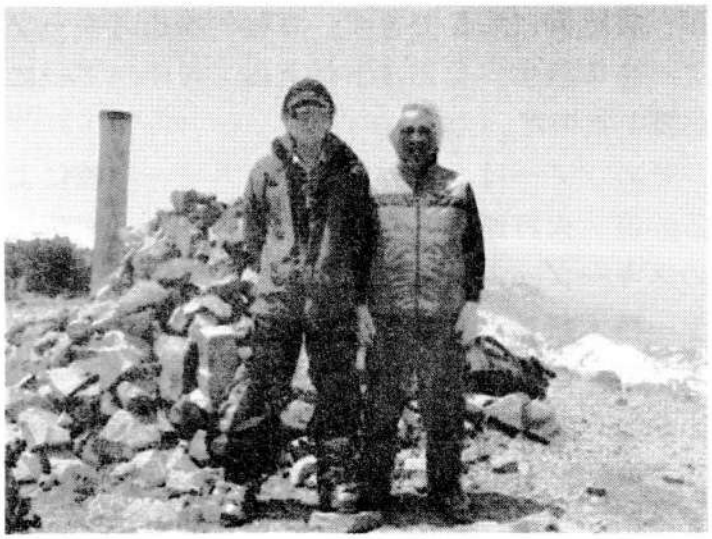
火打山からの大滑降、滑り降りてから仲間を撮る



滑り降りた黒沢岳。左のシュプールが我々の着けたものだ

（ザックを他人に担いで貰うという屈辱を受け入れた結果で）。黒沢池ヒュテは、お碗を伏せたようなドーム型の特徴あるヒュッテである。植木校長がオーナーで、２年前の夏に泊まった時の宿帳から、ツアーのパンフレットが届き、このツアーに参加したのである。

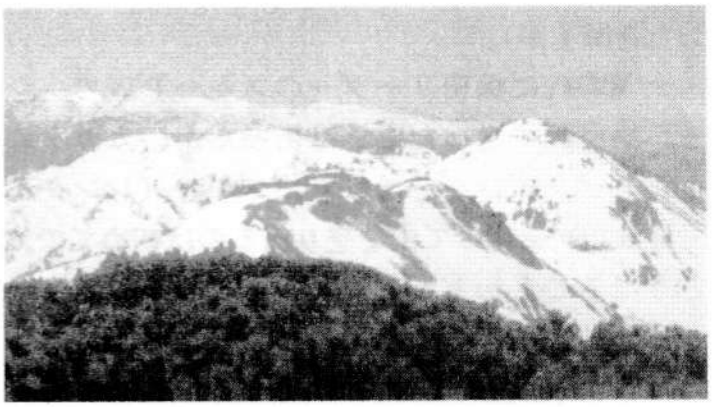
初体験のシール登行で、両足とも棒のようになっていたが、同行のどんぐりスキークラブの人達と酒を飲みながら語り合えた事が、疲れを癒してくれた。６４歳の最年長者は、山スキーを始めて３年目、スキーを始めて５年目と言う。その他のメンバーも全員が５０代で、スキーと山登りが大好き人間であり、すぐに皆と打ち解け、楽しく語り合えたのであった。



火打山山頂で、植木毅校長とのワンショット

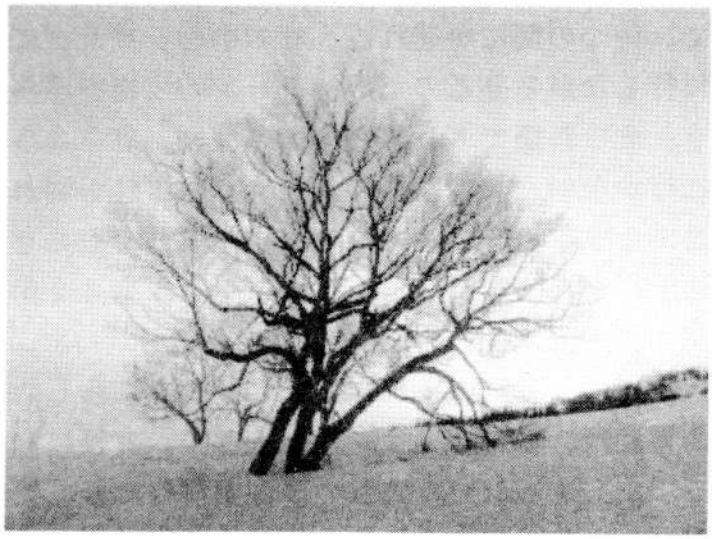
そして、夕食後は、同志社高校の先生方を交えて、植木校長を囲んで、またまたお酒を飲みながらの歓談会となったが、これがまた楽しいものであった。

植木毅校長は、今年７１歳。日本のプロスキーヤー第１号、穂高滝谷の初滑降や、モンブラン北壁の滑降、そしてアラスカ・マッキンレーの世界初滑降などの記録を持つ、三浦雄一郎とと共に、日本のスキー界をリードして来た冒険スキーヤーである。その方が、目の前で、モンブラン滑降やマッキンレー大滑降の体験を、まったく気さくに偉ぶらず話してくれるのである。これは、また応えられない幸せであった。



火打山山頂からは、北アルプスの白馬連峰が美しい

さて、本番のツアースキーは、３日間とも植木校長が登り下りとも先導された。まったくアドバイスを受けることは無かったのだが、名人の後ろを歩き、滑るのであるから、その行動そのものが良き見本である。体格は私より小柄であるが、大きく見える。シールを着けての登りは、ユックリとしたペースで全くペースが乱れない。ワンピッチが１時間、私は３０分もすると息が上がってくるが、植木校長は全く平気で登られる。スキー滑降でも、校長のすぐ後につ



快晴の黒沢池ヒュッテからの朝焼け

いて滑った。カービングターンにとらわれない植木流、急斜面でも余分な力を掛けずに、自然体で斜面を滑る。なによりリズムが素晴らしい。

今まで、自己流で滑った時は、オフピステの急斜面では、怖さもあって体が固まり、思ったようにターンを描けなかった。それが、名人の後について滑るだけで、自在に滑れるのであるから不思議である。雪は柔らかかったが、沈みこむことも無く滑り易い雪であった。

火打山の頂上からは、見事な一枚バーンである。山スキーのためにできたような斜面を躊躇せずに名人の後ろについて滑ると、我ながら感心するほどに綺麗なターンを描いてアッと言うまに滑り降りてしまった。

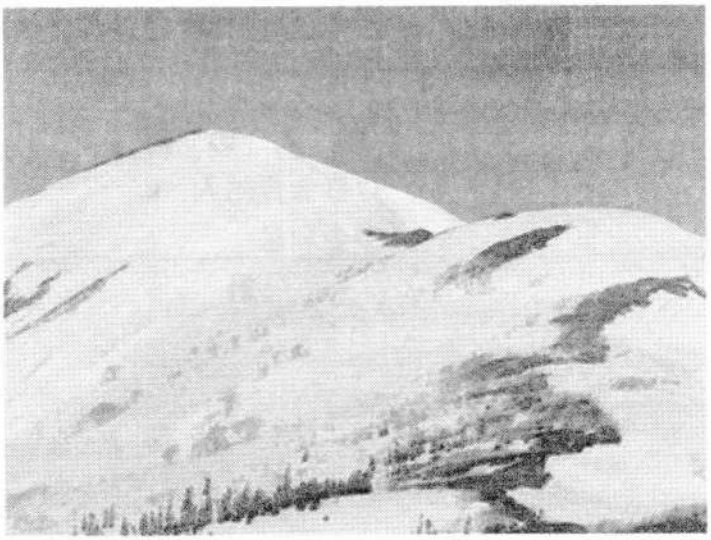
山スキーでは、３時間掛けて登って、滑りは１０分にも満たない。全く不経済なプレーだ。

天気が最高で、スキーヤーも少なく、白く輝く広大な雪面を一人占めして、自由にトレースとターンのラインを描く。この快感は、他に比べようが無い。滑り降りて、自分が描いたシュプールを確認し、一息付く時の満足感を、何と表現出来ようか。

私の４０年を越えるスキーシーンで、殆ど最高の喜びを与えてくれたスキーであった。

この７月に、３９年のサラリーマン生活に一区切りを付けることを決めている。あと何年生きることが出来るかは神のみぞ知るであるが、私には山とスキーと二つの生涯を掛けて楽しめる趣味がある。このきっかけを与えてくれたＫＵＷＶには大感謝だ。特にスキーは道具の進歩もあって、次々に新しい発見があり、その世界が拓けて行く。来シーズンから土日・連休にとらわれずにスキーが出来るのだからたまらない。

まさに、定年万歳である。ゲレンデでのカービングターン追求、オフピステのパウダーラン、山スキーに海外スキーツアー。楽しみ方は、限りない。スキー万万歳である。



最終日、黒沢岳の前での記念写真

ＯＢ会会計報告

（平成18年12月1日～平成19年11月30日）

【収入の部】

ＯＢ会費納入	110,000
預金利息	1,325
計	111,325

【支出の部】

ＯＢ会報（やまざと）No.21印刷費	195,000
郵送費	40,520
No.20郵送費	680
ＯＢ役員と現役との懇親会	42,990
能登半島地震義援金寄付	100,000
前田先生退官記念品	12,600
〃　退官お祝い	30,000
小屋酒場関係費	68,999
慶弔費	5,008
事務備品費	11,962
その他	1,680
計	509,439

【差引剰余金】

前回（18.11.30）繰越金	1,521,942
収入の部	111,325
支出の部	509,439
差引合計	1,123,828

23期　鳥越伸博
（会計）

金沢大学ワンダーフォーゲル部ＯＢ有志

ランタン・フラワートレッキング１２日間

平成19年８月８日～19日　　記録係：15期　舟田　節子

（写真はすべて長岡正利Ｌ撮影のもの。
また、記録はご校閲頂きました。）

◆メンバー

長岡　正利　11期　国土地理院ＯＢ
上村　人史　11期　日立ソフト
舟田　節子　15期　学習塾指導者
Ｙ　　76歳　国土地理院ＯＢ

バックアップスタッフ

北　　正昭　３期　在バンコク
奥名　正啓　15期　気象通報担当
深井　嘉浩　29期　気象通報担当

（地図）

《ラディソンホテル前で》

「思い出せる限り書き留める」を趣旨とした原本は24ページに及ぶ物です。限定15部のそれは一部ＯＢには、寄贈・回覧されています。雨期のヒマラヤ紀行は珍しく、それなりの価値があるものの、会報の24ページ分を占有するのは…。よってこれはダイジェスト版です。もし反響が大きければ（？）、ＨＰから原本を見られるように、篤志の方にお願いしてみることにします。（といっても８ページの短縮にすぎず…）

◆プロローグ

「このコースだったら行きたくありません！」

ワンゲルＨＰに掲載の前日になっての宣言。行き先漠然のままで、お盆の頃に休みが取れるのはどうやら４人となり、その１名の発言であったから、そんな我儘おばさんがキャスティングボートを握ってしまった！？

10日＋アルファでの二度目のカラコルムトレッキングは、国内便利用でさらに奥地へ入り込む予定だった。それが発案時よりさらに政情が悪化し、また、めでたく独立起業したベイグ氏（長岡先輩が昔から懇意にしている現地ガイドで、２年前のカラコルムにも同行）にいたっては、彼が私達に同行している間の緊急連絡体勢が大丈夫か？などがあやしかった。かくしてお盆時期の帰国便を確保できるぎりぎりまで待っての長岡大本営発表の「厳選コース」は、結局のところ、２年前に毛が生えた程度のコースとなってしまった。パキスタン通といえる長岡先輩にしても、10日間程度の足枷がかかればさして選択肢がないのが、長い長いカラコルムハイウェイの助走を必須とするカラコルム山域なのである。

そこで代替案として浮上したのが、夏のネパール・ランタン谷だった。「お客様は神様…」のツアー会社でもないのに、さっと引っ込め即代替案を提示して下さる先輩には平伏。そのうえツアー会社以上に、もう一つ代替コースもあげて比較検討ポイントが羅列されてあり、もちろん地図も添付されていた。他のお二人は長岡Ｌ以上のＬはいないと、全幅の信頼での「どこであれ異論なく参加」であって、「夏のランタン谷なら行きたい！ランタン♪ランタン♪」の私の希望が通ってしまった。

もちろん夏のネパールは、雨期の真っ最中であってトレッキングシーズンではない。しかし、日本の高山だって、条件が厳しいから一斉に咲き競う花畑ができる。もっと厳しいヒマラヤなら、もっと華麗に夏が謳歌されるはずだ。そして私は２年前の28日間には満点といえる旅をしたが、それは乾期の風景に限定されていた。

観光とトレッキングシーズンという国全体がよそ行きの顔をしたネパールの方しか、私は見ていないのではないだろうか？

「雨期こそのヒマラヤの花を見たい」「シーズン外れのネパールの素顔が見たい」は、ツアーカタログにさえ載っていないことで、漠然のままの願望としてフワフワと漂っていた。それなのに、ネパール・ランタン谷が浮上したのだ！これ以上の行き先はない！我儘は言ってみるものだ！（…相手によりけりです）

なお、ランタン谷は探険家ティルマンが「世界でもっとも美しい谷」と紹介したことで名高い。（長岡Ｌによる注釈：昔は簡単にはあちこちに行けなかった。だからティルマンさんも、他の良い所を知らなかったのでそう言った？）ネパールには主なトレッキングエリアとして、エベレスト方面、アンナプルナ方面、ランタン谷の３箇所がある。このうちランタン谷はカトマンズから一番近く、さらにはヘリが熱帯雨林を越えて標高3010mのゴラタベラまで運んでくれるために、時間短縮が出来ることでの人気が高い。一般向け最終宿泊地点キャンジンゴンパは3840mで、高所検診が必要となるものの、ランタン・リルン7225m、ガンチェンポ6387m、ドルジェラクパ6986mといった形のよい山の展望が得られる。さらにはピークアタックをしたい人には、ヤラ・ピーク・サウス5520mがあるという山域である。

今回は雨期だからヘリは飛ばず、熱帯雨林を延々歩いて行く。そして、キャンジンゴンパ（そこまではロッジ泊）より一つ奥のランシサカルカ4125mでのテント泊をプラス。予備日一日を設けての11泊12日間の旅なのだった。

長岡Ｌは、２年前のカラコルムより標高が高くなることを心配されて、毎日のように微に入り細に入り、高山病対策や、雨期対策をふくめた装備、ルート説明、検診、査証取得の連絡などを送信してきておいでた。パルスオキシメーター（血中酸素濃度計）、ガモフバック（高山病症状回復のための、携帯用全身加圧バッフ）もＡ社から借りるとともに、衛星電話の手配にその練習。

さらには気象検索サイトも調べて、日本でそれを見て現地からの衛星電話による定時交信時にそれを連絡してくれる篤志を募集しておいで

《ランタン村の子供達》

た。それはそこそこＰＣが扱えて、天気図が読めて、多少は時差も気にして連絡体勢をとってくれる人材となる。まず家族となると、これがまた、留守をする我儘な親が、さらにフォローを頼むなど、ちょっとできない相談…。しかし「奥名さん（15期）ならＰＣバンバン。それに、金大ワンゲルＯＢ有志のツアー名になってるんだから、バックアップしてもらえます！」と節子は能天気にご指名。もちろん彼からは快諾がきた。それにＡ社の深井所長（29期）も、チェックしてくれることになった。そのうえ、乗り継ぎ地のバンコクでは、セカンドライフを始めている北先輩（３期）が夕食ご招待をして下さることにもなっていた。

かくして参加者４名ながら、「金大ワンゲルＯＢ有志」のネーミングに恥じないバックアップを受けて、出発！

◆８月８日（水）　～バンコク

ご近所の手前、金沢を出る時はコソコソと…になるのだが、成田エクスプレスに乗ると、こんなにも多くの人が国外へ出るのかと驚く。そんな流れに乗って南ウィングＫカウンターへ。

リーダー装備を持つ長岡Ｌは荷物が一つ多い。上村先輩は、トレッキング中にもそのまま本人が担いでいても支障ないような小さめザック。半袖、半ズボン（蛭にやられますよ！）が主体だとそうなるのかしら。今回は、機内禁煙に続き本格禁煙に入る…がかかっているらしい。煙草を一本手にする度、なぜか解説めいた言い訳がついていて、それが繰り返されのがまたお

かしかった。ＰＣを生業とする彼は、長岡Ｌが送ってくれた地図と、グーグルから取り込んだ地図をアップして、帰国後すぐ旅行記となるようなセッティングを楽しんでいた。地理院ＯＢのＹさんは相変わらずお元気。２年前にエベレスト街道のタンボチェで遭遇しているから、３度目の同行のような錯覚がある。２年前以上にリラックスして、出国手続きをとる。

乗り継ぎ地のバンコクはモダンなパイプ屋根が覆い、２年前とは違う。スワンナプームは、昨年９月に開港したばかりの新空港だった。空港本体は何とか完成したものの、空港までのモノレールは間に合わなかったというより、いつ完成するのかわらないと、迎えに出た日本語ガイド嬢は笑いをとった。

北先輩とはホテルのロビーで待ち合わせ。14年前のＯＢ会再興の時には実行委員長としてご尽力いただいた方で、再会できるのが嬉しい。初対面の長岡Ｌの方は、北先輩の奥様は田村教祖の妹さんなのだの情報に身構えられた（？）ようであったが、北先輩はニヤニヤと「いやあ仲の悪い兄妹で…」と返された。電話を何度もとりついで頂いた奥様にはまだお目にかかっていないけれど、「兄が大変ご迷惑をかけて」と、気配り細かい方だ。そんな奥様は、アジア屈指の都市バンコクに来訪されても居心地悪く、早々帰国されてしまうらしい。

北先輩は、輸入機械のメンテナンス工場の社長を友人から引き継がれたとのことだった。私には細かなご苦労はわからないけれど、実質的に必要とされる援助とそれができるセカンドライフは素敵だなあと思う。ホテル近くの、中華兼タイ海鮮料理店に入った。秋篠宮殿下もご愛用と紹介されたそこは、食べている間にも客が次々と席を埋めていった。ここはリッチ層が来る店にあたるそうだが、そんな成功を謳歌するような談笑が、３階フロアにも溢れんばかり。スパイスの本場とあって、蟹料理もトム・ヤンクンも絶妙の味だった。

店を後にした10時頃も、人通り多く、喧騒溢れる街だった。

《Ｙさん、上村先輩　北先輩　舟田　》

◆８月９日（木）　～カトマンドゥ

機内の座席は「窓際を」と頼んでも、４人横一列で確保される。もちろん長岡Ｌに窓際に座って頂く。機窓から写真を撮れる腕をもち、かつそれがどこかも判るのは彼だけなのだ。私達は、トイレにさっと立ち易い側を喜ぶ現実派だった。

雨期の東南アジアの平野一帯は洪水だらけ。それを機上で憂えても始まらない。ヒマラヤが雲上に聳えてくれたなら…であったが、やはり夏の雲はたくましく各所で盛り上がり、「あれが…」にはならなかった。

トリブヴァン空港に降り立った。政府要人らしきを迎えるらしく、滑走路には綺麗どころがずらりと並んでいた。さっそく長岡Ｌが膝をついてカメラに収めていた。

迎えてくれたのは見覚えがある…と思ったら、Ａ社カタログに載っている、日本語堪能現地ガイド３人中の一人だった。一週間前には舟を浮かべて往来するほど洪水状態だったが、今日は幸い晴れています…と、ほほえんだ。そして勝手知ったるラディソンホテルに向かう。

ロビーに落ち着いて、さっそく長岡Ｌはいくつもの現地確認ポイントを詰め始めた。肝心のシャブルベンシまでのバスは、やはり「アクロ」で、崩壊地の向こうに、乗り継ぎバスが用意されているとの返事だった。「悪路とは？」とその程度を聞くと、肩をすくめて「アクロです」と答えた。日本とは基準が違うであろうから問い直しても…。カラコルムでロデオ走行を体験しているから、そうびっくりもしないであろ

うと他のメンバーも思い出したような視線を交わし合った。

早速市内観光に回ることになった。空は幸いに青い。そして街並みには明らかに観光客が少なかった。ネパール人達が日常のままに往来している。その分物売りだけは、少ない観光客に

《パシュパティナートにたむろするサドゥー》

売り付けようとしつこくまとわりついてきた。「イクラ？」「ヤスイ！」の攻勢に、ルピー、ドル、円が混ざり合って見物どころではない。

ともあれ、パシュパティナート（ヒンドゥー教寺院）ではお祭りでもあったらしく賑やかで、次から次と遺体が運ばれてきてもいた。よく見れば火葬場にも、大中小（！）があって、薪の量や、群がる人の数も違っていた。ここで荼毘に付され、ガンジス川の支流であるこの川に流されて消えるのが、彼らの至福なのだ。残り火から突き出している腕や、烏が群がり浮かぶ燃え滓が、そう不快でもない。そう信じて死ねるのは幸せ、そう信じて送り出せる遺族も幸せ…。この国へ来ると、「生きる」とか「死ぬ」とかは仏の手の上でのバタバタにすぎないだろう…が、すうっと得心できる。

チベット仏教第一級の聖地であるボダナートには、寺院を時計回りで巡り歩く人々がいた。やや憑かれたように、立ち止まっている人との衝突も意に介さない。五体倒地に励む人もいる。森羅万象を見通すという大目玉がそれらの人々を見下ろし、経文を刷った五色の旗（タルチョー）が縦横に張り巡らされて、その隙間に夏空が広がっている。私達観光客は見えないがごとしだ。

しかし、さすがに聖地をとりまく土産物屋はそうではない。私が「本物のタンカ（仏画）を探してるんです」と言うと、Ｙさんが「確かこのあたりに工房があった」と言う。たまたま足を停めたタンカ店で、あれよのまに奥に連れ込まれた。店の二階が工房になっていて、刺繍台のようにキャンバスをピンピンに縫い留めて、若者達が面相筆で描いている。中央の一番条件のよい採光の元に座って大作を描いているのが国宝級の女史とのことで、他はその弟子だということだった。売り物もそのようにランク付けされていた。様々な絵柄があったものの、円盤の中に幾何紋が埋まった物が最高位の宇宙の真理を描いた曼陀羅になるらしい。

迷いに迷って、値段では粘って、最後のスワヤンブナートに回れたのは夕暮になってしまった。ここにはカトマンドゥ盆地が大湖であった時、その一角を文殊菩薩が断ち割った後で最初に現われた丘…の伝説がある。そのとおりに盆地全体が見渡せる。長い雨の後の晴天とあって、スモッグは消えうせ、遠望のきく街並が広がっていた。

◆８月10日（金）　～シャブルベンシ1430m

朝のロビーで、サーダーとコックの挨拶を受ける。日本語はコックが少し…とのことだった。ホテルに横付けされたバスには他のスタッフ達が乗り込んでいた。

朝は喧騒に拍車がかかる。警笛を鳴らしまくっての縫うような運転は、ふと止まり、引き返して、露店通りに下がり止まった。どうやら生ま物の仕入れと、そこでの居住者が追加されたらしい。そんな時も長岡Ｌは、さっさと降りて、撮影三昧である。

エンジンがかかり、街並を抜け、丘陵地へ。消費地に近いこのあたりは見事な段々畑、いや棚田だ。稲の丈は短く、どうやら二度目の稲のようだ。隣に座ったナムカ君は、ちょっと欧米系の顔立ちで、おじさんであるサーダーとは、

《唯一拝めた高峰　ガネッシュヒマール》

ドイツのお客を専門にしているらしい。「英語はまあまあ、日本語はほんのちょっと。どれも話す方は簡単だけれど（トレッキング中の必要会話は限られている）、文字の読み書きが苦手で、勉強している」と言った。展望のよいカカニの丘近くを走る。雨期の今日、空は青いが、眼下の谷は雲で埋まり始め、薄いガスがベールのごとく視界をさえぎっている。そのガスがすうっと流れて、高峰が突然浮かんだ。ガネッシュヒマール！山が見えなくてもいい…とやってきたが、見えた方がいいに決まっている。やっぱりすごい！写真になる！

バスはさらに谷を縫い、高度をあげていく。時々民家が出てきて、またひたすら山また山になる。そんな山奥の平坦地に家が密集して、バザール（市場街）が現われる。トリスリバザールが今日の昼食地点。入った大衆食堂で、スタッフの一部はダルバート…カレー風の豆スープ（ダル）とご飯（バート）…を注文していたが、客の私達は奥の小部屋に案内された。まだ初日とあって、予約してあったのであろうカマンドゥ市内和食店の和風弁当が並べられた。

外へ出ると、炎天の下、男も女も賑やかに行き交っている。バザール以外、工場があるわけでなし、会社があるわけでなし…。貨幣経済にさしてご縁がなければ、もてあます時間が残る。見るからに暇そう…と、それをわざわざ見にきた私達。

そこを出れば、またも時折民家が現われる山合いを縫い進む。斜面を利用して石を積み上げた家屋に住み、雑草だらけのトウモロコシ畠から収穫し、水にも恵まれた亜熱帯地方の丘陵地帯は、薪も牛に与える草も周囲から確保できる。貧しいけれど、どこに小屋を堀立てても、とりあえず生きてはいける。どんなに離れた粗末な一軒家の前にも、子供の姿があった。巣を作り、子供を産み育て…これが生き物の本能に忠実な生き方だと、こんな所で感じ入る。ランタンが著名なトレッキングエリアといったところで、ヘリはこれら村々の上を飛び過ぎてしまう。ヘリが飛べなければ観光客は入ってはこない。時間が止まったままといえるネパールの山村がここにはあった。

そんな周囲と場違いに延びる基幹道路は、どこかの国の援助でつけられたのだろうが、メンテナンスの費用までは出てこないものだ。乗り継ぎ点はどこなのかとハラハラしていると、「ガタン」の後に運転手は振り返り、バスを路肩に停めた。途中で底をすった時にうけたダメージが、ここへきて…ガソリンタンクを支えるU字型のバーが垂れ下っていた。ワイワイガヤガヤの後、タンクは床穴と窓を利用し、荷縄で大巻きにされて固定された。応急処置の根性には脱帽ながら、さてどこでギブアップかとお尻は落ち着かない。

それでも無事乗り継ぎ点にたどりついた。Uターン用にかなり手前に停まったのだが、堀立て茶店が並び、声掛けを待つポーター達がたむろしている。

途中の村で、二人のポーターが追加雇用されていた。彼らも混ぜて荷造りがなされている間に、客である私達は歩き始める。霧雨状のガスで遠くまで見えない。路面のほとんどが崩れ去った地点を、これじゃあ仕方がないと通過したが、結局大小７箇所、約３キロに渡って、土砂崩れが起こっていた。「アクロ」…よほどの援助がなければ補修は望めない。

またも茶店がでてきて、そこが乗り継ぎ点であったが、バスは？いない。一旦通り過ぎてしまったトラック…インド製のＴＡＴＡ（大型トラック）がそれだと言われて戻る。Ｙさんと私は好待遇で運転席に乗せてもらえたのだが、中央に座ったＹさんは捕まり所もなくギアチェンジの度右脚を持ち上げるはめになり、私はひっかかっているだけのドアレバーをずっと押さえっぱなしになった。まさにアクロで、岩盤が剥

《トラック荷台での品定め？》

出しになり、滝にもなった道…日本なら絶対通行止めになっている道を、ふかし走る。大型だからカラコルムでのジープよりはましともいえたが、まさに全身マッサージの大揺れだ。大きな町ドンチェでそれは停まり、スペアタイヤの補修を始めた。最後まで無事走ってくれるだろうか？

カメラを出す気にもなれない私をよそに、長岡Ｌはまたさっと荷台から降りて、雨上がりの町と人を撮影中。再び始動したそれは、チャーターかと思っていたのに、途中次々と客を拾い、その人選もまちまち…というかあきらかに女性にえこひいき。そして後ろに乗った上村、長岡先輩は、しっかり「荷台の品定め」をやっていて撮影もしたらしい。美女同士の張り合いがなかなか見物だったと語った。そんな異国の美女に気をとられていたせいか（不審な荷物の上に詰め込まれたのと大揺れで）、上村先輩は早くも、靴下を血で染めていた。

トラバースから川岸におりるつづら折りのアクロも、かなり手に汗握ったが、トリスリ川を無事渡り、ようやくエンジンが停まった。谷間のシャブルベンシもバザールで、布屋、雑貨屋、食品店が道の両脇に並んでいる。スタッフ達が荷を運び入れているのは小綺麗なロッジだ。さっき渡った橋の所に発電所があり、電気が使え、お湯も出る。デジカメの充電に安堵した長岡Ｌだったが、すでにＳＤカードの残量がやばいそうだ。そりゃそうでしょう！あんなに撮ってるんだから…。私のスペアを供出する。いい写真を後で分けてもらう方がずっとラクチン。年々向上心のなくなる私…。

◆８月11日（土）　～ラマホテル2435m

アクロも無事通過、いよいよ徒歩でのトレッキング開始ということで、コースチェックを行った。ラマホテルまで、左岸の丘陵を越えるコースと、右岸のほぼトラバースで上がるコースの二つがある。もちろん登りは、高低差の少ない後者をとりたかった。

ところがそんなコースはなく、そのかわりランタン・コーラの左岸に、川に沿った道があるのだという。ならば川の傾斜で登っていけるのだから、楽だ。

だがもっと大変なことが発覚。最終宿泊地点はランシサカルカであったのに、ロッジのないそこはテント泊まりであったのに、サーダーの持つ手配書に、テントの記述がない。慎重な長岡Ｌは、Ａ社の英文手配書と、それへの返信の現地ツアー会社の手配書も持参してきていた。サーダーが手にしていたのは、ごくごく一般コースとしてのキャンジンゴンパを終点とし、すべてロッジ泊まりというものであった。だから装備項目にテントの記載がない。

サーダーは２通を見比べ肩をすくめて“What shall we do? ”と言った。

もちろんテントを使うことになるのは、全てが順調に行った場合のみであったし、この手配ミスはサーダーの責任ではなかった。結果的には一般行程通りの進度となった。76歳を含めたメンバー構成を見て、現地会社がそこまで読み切ったものかまではわからない。

ともあれ、やや微妙な雰囲気でトレッキング初日は始まった。車道脇のちょっとした階段を降り、集落外れで許可証のチェックをうける。目前には、ボーテ・コシとランタン・コーラの合流点があり、ここから下流はトリスリ川と名前が変わる。まず吊橋でボーテ・コシを渡り、車道ができる前からある本村のシャブルベンシを通過。さらにランタン・コーラを渡ってそのまま左岸を伝っていくのである。

車道沿いにできた新村はバザールとなっているが、そんな発展からとり残された本村の方には、軒先迫る貧しい長屋が並んでいた。雨期の雨と氷河の融水を集めて、轟音あげる川をまたげば、そこからは草いきれの道が延びる。雲母を多量に含んだ石はギラギラと陽光をはね返し

、汗がしたたる。もうＹさんの足は止まりがちになった。薄着になるよう勧め、「もっとゆっくり…」とトップのナムカに指示する。ナムカ君はスローに付き合うべく、ドイツ語のガイド本を手にしてチラチラとお勉強。親しくなった客がプレゼントしてくれたそうで、それが彼にはガイド語学の教科書なのだった。

支流をまたぐ吊橋を渡った先のロッジで小休止。ネパール人は一日２食だから、ポーター達はそこで朝食をとったらしかった。格子柄のショールを頭からかぶったり、あるいは荷物とのクッション材にしている女性と、おかっぱ頭で結構イケメンの青年と、右目が白濁した男性…よく笑いかけてくる彼に正面からの笑顔で返すのにはやや時間が必要だった。あとの二人はサーダーが車中から声を掛けて現地雇用した地元住人で、重い荷が割り当てられていた。わめき合うような交渉成立の後、彼らは帰宅して当分留守にすると家人に声を掛けてきたのだろうが、それで増えた手荷物は額紐と小布だけだった。一人は裸足でもあった。

ロッジの老女が椅子を勧めてくれ、自分は庭先で織物の続きを始めた。彼女の喉には古いネパールガイド本に乗っていた写真どおりに、大きな瘤ができていた。それにはヨード不足による風土病と出ていた。彼女の頭上にランタン・コーラの奥には高峰が見えた。このまま好天が続いてほしいものだが…。

傘は思わぬ場所で出すことになった。一枚岩から張り出させた道の、さらに先では滝が頭上から覆い流れ落ちており、濡れ鼠が避けられない難所になっていたのだ。そこからあがった所が昼食地点のランドスライドロッジ。対岸に二人ほど入れる温泉があるそうだ。人通りが多いとも思えないのに、新しいロッジを建築中だった。

《晴れ間の庭で、機織りに励む老女》

さらに先のバンブーロッジでは広くなった川原に数軒のロッジがあり、空から降ってくるような滝が対岸に見られた。しかしどのロッジも閉まっている。シーズンオフだからだが、かえってさっきの昼食地点が営業していたことの方が不思議だ。

谷全体はやや広くなり、広くなった分を熱帯雨林が覆い始めた。旺盛な光合成と菌活動。うっそうと垂れるシダ植物にシッキムの旅を思い出すが、あの時のようなシッキム訛りで鳴く鳥の声はない。というより、盛り上がるばかりの大水流の轟音が話し声をもかき消してしまう。インド洋からの水蒸気が、太陽エネルギーを蓄えて再びインド洋へ還ろうとしている。大地を削り流さんばかりの雄叫びは、時としてしぶきを風に運ばせ、足元も揺れている錯覚に陥る。

場違いのような鉄骨橋を渡り、すぐ上の崩壊地をへつると、ようやく道は川からの高度を上げ始めた。さっきまでのイワタバコやミョウガの仲間とは違う、やや高原風情の花が出始める。崖には黄色の小型のランが咲いていた。

午後の雲が広がり雨がおちてくる。下山してきた現地男女は、傘なし。我が隊もナムカ君が長傘、サーダーが折畳み傘のみで、両手を額紐に添えるポーターも、キッチンボーイも、傘などささない。しかし、荷物だけはさっと大判ビニルをかけて雨対応をする。

さらにうっそうとした熱帯雨林に入る。先程より気温が下がり、シダ類よりは苔類がびっしり。頭上を覆われて、３時といえども夕方気分だ。展望もなく、Ｙさんの高度計の「２２００を越えた」「気圧が下がってきているからずれているかも」が、気晴らしの話題になる。

木製のゲートをくぐった所がラマホテル。蔓をからませて、朱と白の花を咲かせているのはインゲン豆のよう。庭先のリゾートチェアーに座り込む。Ｙ氏ならずとも、歩きはもう結構の気分で、ホットジュースを頂く。あれ、上村さん、紫煙があがってますよ。

来る前におどされた蛭は結局出なかった。「

《今回も出てこられました。感謝！》

これまで良い天気が続いていたので、地中にもぐったのでしょう」がば長岡Ｌの説明だった。

左手の煙漂う平屋がダイニングで、ベッドルームは別棟の、段差の大きい階段を登った上だ。他の５軒ばかりのロッジに人影はない。レディファーストで、ホットシャワーを使わせてもらった。鍵はかからず、閉めれば真っ暗、衣類を置くスペースもない。贅沢はいえないのだけれど、ちょっとずつの不便が、少しずつの疲労として蓄まっていく…体力の他に耐力も必要なのが辺境の旅。

食事は毎度撮影記録付き。揚げ菓子の前菜、にんにくスープ、ライスにおかず３品くらいが乗った皿。「プギョ（いらない）」「アリアリ（少し）」の単語とともに、最初から胃が半分一杯の感覚も思い出す。今回も長岡Ｌはこまごまと和の副食品を用意してきて下さっている。みんなに奨めたり、半端な使用品の封をしたり、最後にはきちんと食缶に収めて封をしてキッチンボーイに渡す所まで…。余力がなくなり、ますますズボラになり、気配りもできなくなっていく私はここでも平伏。

オーナーは、長岡Ｌにデキモノの薬を無心していた。私は抗生物質を持参してきてはいたけれど、症状に応じての分量が分からないし、薬慣れしていない人に善意のプレゼントとするのも戸惑うものがあった。彼が見せた傷はもうカサブタが張っており、無難に「持っていない」ですませた。

そういえば、ネパール協会内の学校支援をしている人が、学校に救急箱をプレゼントしたことがあったそうだ。近隣の村からも村民がおしかけ、夜昼なく授業は妨害され、マーキュロなど医薬品は実際どんな使われ方をしたかも不明になったそうだ（説明書をつけてあっても読めない。読まない）。「素人が持ち込んでいいのはせいぜい傷バン。それでも数が限られて騒動の種になるのがオチだから不用」が、善意からの想定外騒動に肝を冷やした彼の結論だった。

◆８月１２日（日）　～ランタン村3450m

出発直前まで、長岡Ｌは世界天気図と衛星雲画像をチェックしておいでたらしい。一週間ほど異常な好天をもたらしていたらしいチベット上空の高気圧はずれて、モンスーンの典型的な南東の風が吹き込んでくる…の予報どおりの、しっとりの朝だ。今日は樹林帯を抜けられる。でもそれで、眺めが…とはいかない。

樹高が低くなり、高茎草原がでてきて、フウロの濃いピンク、キツリフネ風の群生、紫のトガクシショウマ風の花が周囲にあふれ始める。露を光らせて、しっとり濃い色でそれは綺麗。これを期待して来たのだ！

「目線を花の高さにまで下げて、周囲をぼかすとうまく写る」の講釈に続き、ササと余計な葉やゴミ枝をよけて背景を整えられる長岡Ｌは、ここでも余裕いっぱい。対して私達は、カメラを防水袋から取出しいちいちしゃがむのが結構苦痛で、またも「上手な写真を分けてもらえばいい！」に流れてしまった。そして花に気が紛れるものの、一気に高度をあげる登りが続いた。

登りきり周囲が開けた花の草原は、これがヘリポート？周りに石垣がなく、カルカでもなく不明。さらに進んで背の高いシャクナゲ林を抜けた所が、ゴラタベラ（3010m）だ。昨日から高山病予防にダイヤモックスを飲み始めた私は急いで屋外トイレに走ったが、早くも「夜中に５回行った」の人も出てきていた。知人Ａ氏のスケッチには赤・白のシャクナゲ林とロッジがカラフルに描かれていたし、タルチョーもはためいていたけれど、時期外れとなれば、夏草茂る中にひっそり佇むそれは、廃墟になったばかりか？のように、薄いガスの中で浮かびあがっている。

シャクナゲ林に、サンショのようなとげとげ

《露を光らせるトガクシショウマ風の花》

の灌木が加わる。びっしりの赤い実を上村さんは５粒程試食したらしい。先頭のナムカが、「一個ならＯＫ、二個目からはオエー」と説明している。ヒマラヤンチリという香辛料であるそれは有毒というより、刺激が強いという意味だったようだが、上村さんには後の祭りだった。でも５粒口に出来たほど、おつな味だったらしい。景色が見えなければ、まさに道草を食うことにもなる。

灌木帯を抜け、遠くまで見えはしないが、丘状になり、そこにあるのは兵舎のようだった。ポストでチェックをうけ、申し訳程度の鉄条網を抜ける。ろくに人通りもないのに、ご苦労様だが、こんな時にわざわざ来る方が怪しげな人物であるかもしれない。

ランタン渓谷はさらに広がり、ランタン・コーラの渓谷部もかなり下手に、大きめの沢程度になってきた。バッティ（茶店）前のベンチで大休止をとる。「ティー？」ときかれて注文する。ナムカやサーダーも飲んでいたので、行動食としてのお茶タイムかと思ったら、出発時に、ビール代と同じ額の支払いを請求された。ティーにも現地民価格と、ツアー客価格がある。サーダーがまとめて注文を出せば、あっさり現地民価格になるのに…という話であった。騙された心地がした私達は、次の「ティー？」の時には「ノーサンキュー」にしてしまった。

時間的にはもうランタン村は近い。大吊橋が架かっていた。架けられている脇谷の流れは細く、急峻な崖でもない。緑の斜面を上流にトラバースして短い橋を渡れば…あの下に見えているルートで十分だ。こんな無用の長物クラスを谷の入り口で大々的に架橋するくらいなら、もっと下流のガレ場、それこそあの車道を直す方が優先事項ではないか！しかし、援助というものは、現場事情とは無関係に計画され支給される。もらえる時に、もらえる場所で話がついていく。普通なら迂回せずにすんでよかった…と思うところなのに、ウ～ン、こんなの無駄！と思いながら渡ってしまった。

谷はますます広くなり、特に左は氷河がこすり削った剥出しの大岩壁が続く。何本もの滝がかかっているのが、雨期ならではといったところ。そのかなり大きな水流の下には発電所があるようだった。ランタン村は、発電所があるほどに大きな村といえる。左の丘の上にまず一塊があって、さらに進んだ所にがっしりした石積みのロッジ群がある。むこうで人々が群れているのは学校か集会所のようだ。

道からついと離れて真新しいロッジに入った。右には広い台所、左がダイニングで、ダライラマ１４世が祭壇に飾られている。そこで遊んでいる男の子にカメラを向けると、スーパーヒーローのポーズを決めてくれた。

ここのトイレはダイナミックに大きかった。あとに出来るロッジほど設備はよくなる。オフシーズンの今は、きれいなロッジを楽に選べるようだった。そんなトイレの窓からは、赤色の畑が見渡せる。ソバだと分かった。

ダイニングのストーブに薪をくべてもらい、濡れ物や靴を干す。そのためのハンガーやピンチを長岡Ｌの指示で荷物にいれてあった。ロッジに着いたら着替えて、ストーブの上につるすのが日課になっていった。

◆８月13日（月）～キャンジン・ゴンパ3840m

今朝も雲はたれこめているようだ。傘をささなくてもよければひとまずよし。

迷彩服の一個小隊が朝の訓練中のようで、石畳の道を駆け抜けていった。私達はロッジが並ぶ一角を抜けて村内に入っていく。家々は北側を石で覆い、南側は木彫りの三連窓をつけた木造で、ベランダ状の張り出しの下が牛小屋や薪置場になっている。すすけた年代物の家は、こんな湿った時期にはなおのこと朽ちかけた風情に見える。所在なげに、バンダナ髪、シェルパ

《ランタン村の長屋風住居》

ニエプロンの女性が寄り掛かっている。作物干し場になるのであろう石敷きの中庭、セメント工作の水場・洗い場、その間の石垣に挟まれた石畳の道を抜けて丘に上がる。振り返れば、ソバ畑の他に緑の広い牧草地にも囲まれたけっこう大きな集落だ。そんな集落を一周してきた迷彩服にまたすれ違う。そういえば、マオイストも政党と認められて選挙の施行も決まり、政情不安の懸念もなかったのが今回の旅だ。

マニ石を積みあげたチョルテンが現れ、そこからは延々とメンダン（マニ石を並べた石垣）が続く。経文の浮き彫りは風化して、年代物といった印象だ。子供も、薪を担ぐ老婆も、左側歩行を守っている。つまり、歩道が２本きっちりと平行していて、メンダンが中央分離帯になっている。セリ科の白い花を主体に、フウロの赤、アズマギクの紫、ウサギギクの黄がまじる。両脇の谷はもっとU字谷が開いて、低木と草原の交じる緑の斜面に変わりだしている。谷奥にあるはずのガンチェンポなどは見えない。メンダンが途切れたあたりのカルカはフウロや、テガタチドリなどの花に埋まっている。耕作しているわけでもなく、牧草地とも見えない。大岩を壁面に利用したロッジがあり、岩の角には水牛の角が掛けてあった。ティルマンの見た世界一美しい谷とは、夏だったのか、展望のきくトレッキングシーズンだったのか？そのあとはエーデルワイスの絨毯になった。（長岡Ｌの注：夏だったそうです）

マニチェルン（マニ車を回す水車小屋）があった。それがまたぐ沢に、「夏のゴーキョ」のＣＤで見たプリムラ・シッキメンシスが群れていた。夏の５０００m付近に咲く花なのだろうかと思っていたが、日当たりのよい流れを好む花なのだ。

小綺麗なロッジは、またもお茶を頼んでよいのかどうかわからず通過する。窓ガラスの多い瀟洒なロッジになりだしていて、トレッキングシーズンならきっと大展望を楽しみつつの昼食ポイントなのだろうと思う。リルン氷河からの流れをわたる。白々とした河原に石がごろごろ広がる。ホワイトアウト状態の中を歩くと、展望がきかないのは当然として、あそこまでの目標もたたず、こんなに来たかの振り返りもできない。めりはりのない、ただただ単調な歩きが続き、頭の中ももやっとガスがたちこめているようだ。そんな中を足の長い欧米人３人がさっさと抜かして行った。

濃いピンクの蓼が埋める丘にさしかかる。祈祷旗が立っていて期待をしたが、その先にはまだ平坦な道が延びていた。キッチンボーイ達がホットジュースを運んできてくれ、もう少しとのことだった。毎日高峰を見ても飽きるが、ガスばかりはもっと飽きる。長岡Ｌお得意の「この先で何が見えまして…」が出てくるはずもなく、Ｙさんの高度計の数字が少しは話の種になった。富士山の標高を越えれば、わずかの登りに足が重くなるのもやむをえず…となる。今日は半日行程と喜んだわりに、まだか、まだかの時間が流れる。

石畳風の階段になり、石加工の跡らしきもでてきて、いよいよキャンジン・ゴンパ村は近いとばかりに丘を乗り越すと、ロッジが立ち並んでいた。馬が草を食んでいる。牛ではなく、馬ばかりがロッジの周囲に散らばっている。石垣をまたいで越えて、やや外れにあるロッジに入り、遅めの昼食。連泊だからと、濡れ物をすぐハンガーにひっかけた。

ここでようやく、衛星電話が深井さんにつながった。プラス３時間15分の時間差は、ロッジに到着してから掛けようとすると、迷惑時間になってしまう。途中自宅に掛けて繋がることは確かめたものの、当地の天気情報を入れられずじまいで来ていた。私も電話口に出たけれど、

ネパールの山中と日本の会社という距離を、電話は越えていても私自身は越えられていない。何かトンチンカンな応答をしてしまった。

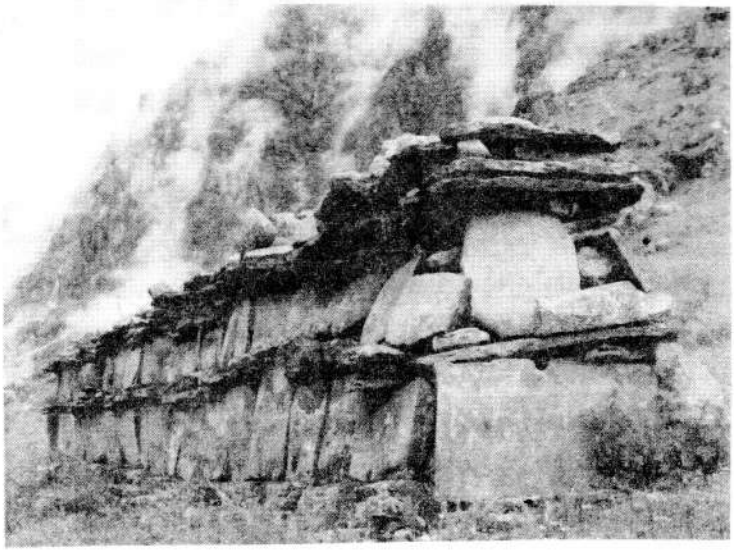
一方奥名さんの方は「この電話は都合で出られません」のメッセージが流れてくるばかりで事情がわからず。衛星電話以前のところで、活用しきれていないことになった。

午後はランタン・リルンの全容を望むことができるという小ピークを登ることになった。明日の支障にならないようにとYさんはパス。

まず、村の名前の起こりでもあるゴンパを訪ねる。しかし、僧侶は下のランタン村に降りていて、鍵がかかっているとのことだった。年代物のゴンパは入口右に木製のマニ車２基があり、そこから内陣に入る戸が施錠されていた。近くの大岩の下を皆が覗きに行ったのは、鍵守でも探しに行ったのかと思ったら、別の修業僧が籠もっていたそうだ。

このワンデリングのトップを務めているのが例の片目の男だった。ここでようやく彼がこの隊のサブサーダー格であって、ここまではポーターを兼務していたのだと分かった。さらには女性ポーターが彼のワイフで、もっと後にはオカッパ頭の青年が彼女の弟であるともわかった。貴重な現金収入仕事はまず身内で押さえられてしまう。トレッカーがどんなに訪れたとしても、豊かになるのは一部だけだ。

リルン氷河からの轟音あげる流れの右をトラバーストラバースで、標高を上げていく。ガイドに先行してもらいながらも、どうなっているのやらだったが、菓子袋や、壊れた魔法瓶などが落ちていて、一般ワンデリングコースであることを再確認する。標高があがったり、モレーンになったことで、花の種類が変わり始める。



《中央分離帯のようなメンダン》

ワンデリングということで、長岡Ｌの持つカメラ専用備品は増えていた。機種を変えレンズを交換してはの悪天にもめげずの撮影で“Are you a photographer?”とサーダーとナムカ君は質問し、“No!”の返事に、かえって納得がいかないようだった。わざわざ雨期に来て、お金も時間も体力も使って、しつこくアングルにもこだわって…それで仕事ではないとなると…。そういう時間やお金の使い方が彼らには理解しがたい。しかし私達もここへ来ると、こんな時間やお金の使い方ができるのは、日本に生まれた御蔭と自覚する。自分の趣味で、自分のお金や時間を使っているまでだが、それがどんなに「日本」に底上げされての豊かさなのかが、わかってしまう。感謝あるのみだ。

傘を出したり、閉じたりの天候は変わらない。このガスでは小ピークへむかってもますます見えなくなるだけ…となって、リルン氷河の末端だけでも見ようとなった。エンドモレーンの一つともいえそうな急斜面を登る。牛に踏まれたりがない分、さらなるお花畑となる。シャジン風、ミネズオウ似…何ということもない灌木までが大輪の黄色の花をびっしりと咲かせて、今は夏、貴重な夏だと告げている。登り詰めての平地をさらに進み、流れは細くなったがまだ氷河の末端にはならない。さらに沢を渡らねばならなくなったところで、渡渉場所を探す彼らに「もういい」のサインを出した。

下りは早い。そして、行きには通らなかったゴンパ上のチョルテンの立つ高台を通過する。村を見下ろすと、建築中のロッジが２軒。円筒状の凝った作りもあり、下はショップだ。どの軒下にも、薪が積み上げられている。シャクナゲの枝のようだ。馬は厩舎に引き上げられていた。

ストーブ燃えるダイニングに入ると、Ｙさんが「この人が薬が欲しいと言っている」とのこと。その老女は歯痛から頭痛に至ったらしい。無難にセデスを渡す。その家の舅らしき老人は、傘や荷物をよけて長椅子の上に寝場所を作っ

ていた。客がいる時には火の入るありがたいストーブ…その暖をとる輪ができていた。

◆８月14日（火）ランシサ・カルカ4125m往復

昨日の薬は効いたのかを聞くと、よく効いて彼女はもうランタン村へ出掛けたという。本当に痛かったのか、トレッカーが来ればダメ元で薬を無心するものなのか…それはわからない。物があって当たり前の私達は、そんな所まで気が回らないし、持てる物が持たざる物に施すのは彼らには社会通念に当たることだ。

早朝は比較的展望のきく時間帯である。谷奥にガンチェンポが見える。春のネパール展で、Ａ氏の油絵を見ていたから、見分けがつく。あの時の40号の作品に比べ、余りに小さく見える山体だった。ランタン・リルンは？というと意外な高さに白い稜線が見えた。二本の幅広い氷河がこちらに下っているのもわかる。しかし頂上部には雲が流れて全容とはいかない。出発を30分遅らせてもらった。しかし、さらに雲が厚くなっただけだった。

ランシサ・カルカへ出発。ワンデリングだからといって、もともと軽量だから、軽くなるといった現象はない。広い草原は、アザミ葉で、花はシオガマ状で、全体としてはルピナス形状の花（マツムシソウ科）であふれている。これらは今しか見られないけれど、そして分かっちゃいるけれど、その場まで来ていて見えない山というのも、やはりしゃくではある。

左から大きく広がる扇状地の河原に出た。下へ下へと下がったが、雨期で豊富な水量の川には手頃な渡渉地が見当らない。もともとサンダル履きのサブサーダーはあっさり渡ってしまい、さて靴を脱いだものかと躊躇する私達。サーダーはささと革靴を脱ぎ私に背中に乗れという。戻ってきたサブサーダーはＹ氏を負ぶった。私は“I'm too heavy”とは言ってみたものの、乗っかるしかなく、細身のサブサーダーも、杖をしっかとついて５m幅ほどの激流を渡した。上村さんは、待つまでもなしと自分で渡ったのだが、直前で前のめりに転倒。すぐ起き上がり渡りきったものの、しばし茫然自失。私もどう声をかけてよいかわからない。幸い何箇所かの擦り傷以外の怪我はなく、衣類を絞り、行動は

《ヌバマタンの昼食　ここが最高到達地点》

続行となった。やや下手の分流した所で、長岡Ｌとナムカは飛び石づたいに越えており、もっと下流なら…の反省は帰路にはいかされることになった。

広い河原に出て、「ここが昔の飛行場だ」という。特に整地されているわけでもない。対岸はかなり向こうにあって、だだっぴろい。崩れたトーチカがあった。なんらかの空港施設だったのか？その手前にあった２軒のロッジももう石組が残っているだけだった。

岩壁がぐっと迫り、ぎりぎりの所で石を渡って、続きの川岸に入る。ブラックライトがあたったような不思議な色の花が群生するようになる。川の淀む所は、氷河の削り屑をためて、セメントを流したような平地になっている。また川が迫る所は、放牧地の区切りのような石垣が組まれていて乗り越えることになった。続く広い緑の斜面には羊が群れていた。そんなジャタンのカルカに、石積みの小屋は見えるが人陰はない。再び道は流れに接近してその後また高巻き状になる。対岸は赤い石の扇状地になった。こちら側はゆるやかな起伏になり、その先石屋根の散在するあたりにチラチラ見えるのはわが隊のキッチンボーイ達だと分かった。朝の出発を遅らせた間に先行していたのだ。布張り屋根の下では現地民がチーズ作りの最中で、さっそく長岡Ｌが被写体にしていた。

ここがヌバマタン。そして昼食となる。前方の丘はエンドモレーンで、それを越えれば、左からの氷河の末端となり、ランシサ・カルカも

間近なのだという。しかし周囲が見えなければ、そこへ至ってもそうなのかでおしまいだ。午後の悪天を予想し、ここで引き返しとする。問題の流れを飛び越えたところで、激しく雨が降りだした。ハイライトといえるワンデリング日も、ただただガスの中歩きで終わった…これがヒマラヤの雨期なのだ。

ロッジのストーブの上に濡れ物を掛けようとして、違うタオルが増えているのに気付く。日本人客３人…男性２人と女性１人が増えていた。同行しているのは、日本語も英語も達者な、やや気障っぽい雰囲気のガイドだ。ここまでは歩いて登ってきたが明日はヘリで一気にカトマンドゥまで降り、さらに他へ向かうのだという。こんな天気で飛べるのかいな？という思いと、３日分のロッジ代＋人件費との差額は実際どれくらいなのだろう？の羨ましい気持ちと…。しかし、お金を積んでも飛べない時は飛べないのだ。

衛星電話に着信記録があった。それは深井さんで、掛け直すと、インドの北に低気圧らしい大きな雲域が発生したという情報だった。なんで奥名さんには掛からないのだろう？と念のため携帯に掛けてみると、それは繋がった。もう帰途につくのだから「全員無事。予定通り進行中」を連絡した。天気図と現地天気を刻々と照合したら面白い…のかすかな企画は、この程度のお粗末交信の結果、ボツになった。

昨日の老人が、今度はむこうのベンチの上を片付けて、丸くなっていた。

筋でもない。毎度のこと…くらいだ。

荷物が減ったせいもあり、サブサーダーがザックを背負ってトップに立つ。昨日から後ろへ回ったナムカ君は、サーダーとよくしゃべっている。やたら「アーチャ」という相槌が聞こえる。ガスで高度がわからなかったのと、辛いことは忘れる…があって、エッこんなに登っていたんだっけのようにどんどん下る。下りで暑くなってきた以上に、日差しが強くなってきたようだ。久しぶりの青空が広がりだしている。とはいえ谷奥に、雲は垂れたままだ。

日があたれば、ランタン村はのどかな緑の村だ。晴れ晴れと人が出歩いている。歯磨きや洗濯に励む女性達。その後を追う子供達。中庭いっぱいに広げられた穀物類。鷹匠の青年がイヌワシの世話をしていて、人が群れている。その撮影は断られた。朽ち掛けた三連窓にも日が当たり、干し物がそこらじゅうにひっかけてある。登りに泊まったロッジで、早めの昼食をとる。二階のトイレを借りに行くと、廊下の突き当たりの窓辺で、女性が糸を紡いでいた。

下村にゴンパがあるとのことで、見学に寄る。最後の喘ぎのように石段を登りつつ、来し方を振り返ると、山頂部は雲に覆われているものの、谷には太陽光があたり、まさに緑濃い谷が延びている。パタパタパタの音…迎えのヘリが晴れ間を縫って飛んできたのだ。ああ、いいなあ…。

このゴンパの木彫り窓もやはり閉じられていた。そこから、チョルテンの前の広場で、脱穀

８月15日（水）　　～ゴラタベラ　3010m

トンカチ、トンカチ…朝の６時には、ロッジ建築現場からの石割りの音が響いてきた。

「早めに荷物をまとめて…」とあちらのガイドが言っている。対岸の黒い岩峰が今見えてはいるが、晴れてはいない。ゴラタベラまで一気に降りる私達は彼女達に見送られて出発。ただし、ゴンパ見学をしてからだ。ところが、昨日の「早朝なら見せてもらえる」「鍵を預かっている」の話が、またも「僧侶はもう鍵を持って、ランタン村に降りてしまった」になった。約束を入れていたわけでもないから、文句を言う

《脱穀に励むランタン村の人々》

に励む４人の男女が見えた。振り下ろして、叩いて、頭部が回転するだけの単調な道具だ。下りは元の階段へ戻らず、その標高から草原をトラバースして本道に合流した。その途中の空をヘリが戻っていった。ワーイと手を振る。もう一度ランタンへ来ることがあっても、この後の熱帯雨林を再び歩くことはあるまい…。立派な吊橋を片付けの終わったキッチンボーイ達が走り降りていく。フィルムを巻き戻す感覚で、あ、この花撮った、これはヒマラヤンチリだった…と下っていく。雲はたちまち厚くなる。さっきのヘリはまさに１時間足らずのベストチャンスをねらって飛んだことになる。そうでない人達は、蛭の餌食になる道を行くのだ。

再び兵屯地のポストでチェックを受ける。帰路の今度は自分の書いた欄の右端にサインを書くだけでよい。私達が記名した後に増えている入山者は数名だった。

ゴラタベラの直前で、花畑に入り、初めて全員揃った写真を撮った。そこからわずかでロッジ。いい加減な国と思えるわりには、閑散としたルートの中でのロッジは開錠されている。何らかの連絡がとられて、オーナーなり雇われ人が私達の３日分くらいは簡単に歩いて、準備をするのだろう。そのオーナーらしきが隣部屋に手招きするのについていくと、土産物が並べてあった。そしてペンダントに関心を示した長岡Ｌとトルコ石のブレスレットをつまんだＹさんがしつこく付きまとわれることになった。言い値を下げて下げて、最後はてっぺんの石が外れているの、紐の滑りが悪いのと、それで突き放したつもりが、次に彼がにっこり迫ってきた時には、てっぺんには紅色の山サンゴが填められ、紐もそこそこ滑るようになっていた。根負けした二人がついに鴨となる所をあとの二人は笑いをこらえて眺めていた。

そんな商売熱心な彼が運んでくる薪はしっかり湿っていて、なかなか火がつかない。おまけに太陽電池による蛍光灯もろくに輝かない。明るい光が漏れているのは、談笑が聞こえてくるキッチン棟の方だ。こんなダイニングにいてもろくなことはないと、早々にベッドルームに引き上げる。ここのトイレはしとしと雨の草原を横切っての道向こうにある。今夜はサンダルなんて履けやしない。上村さんが早々に蛭に手をやられたらしい。だからトイレが遠いからといって、途中でやっちゃえ！という選択はましてできないのだった。

◆８月16日（木）　～シャブルベンシ

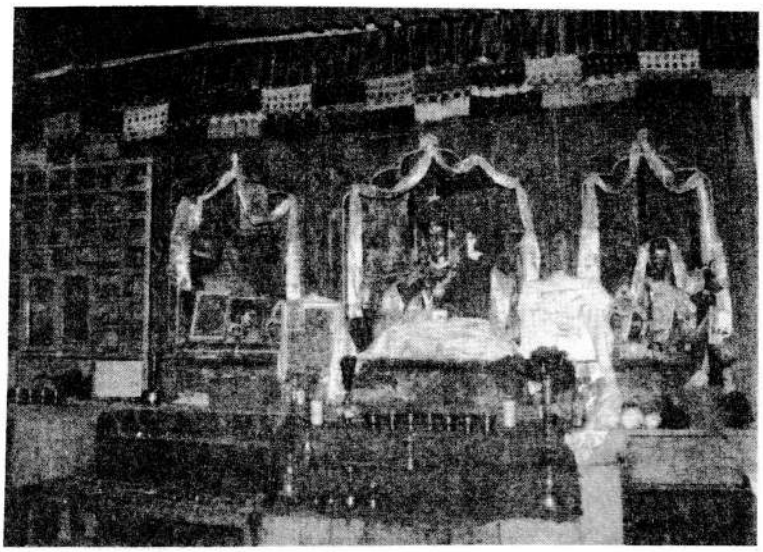
あまりにプレッシャーがかかったせいか、下山となってダイヤモックスの服用を止めたせいか、夜中は起きずにすんだ。「おはようございます」とＹさんに挨拶すると、ニコニコと彼が言うには昨晩、トイレ帰りの長岡Ｌが部屋を間違え、暗闇の中でＹさんのシュラフに手を掛けたのだという。「それでね、舟田さんも、間違えられて困ったりしてはいないかと二人で心配していたんだよ」と言う。「いえ、私なんか毎晩ぐっすりで…」と返事したものの、気にならないという返事が信頼にあたるのか、かえって失礼にあたるのかは？？

ともあれ、本日は断固、蛭対策がいる。虫除けスプレーをかけたり、虫除けナプキンで拭いたり、スパッツで足元を固めたり…。片足ずつ手法を変えて、検証してみるという人もいた。対して、ナムカやキッチンボーイ達は、生足を曝け出している。

うっそうの林に入り、再び轟音響かせる濁流とともに下へ下へ。サブサーダーは奥さんにザックを担がせ自分がポーター役をやっていたが、やがて交換してトップ役になり、さらにＹさんのザックをその上に乗せた。

滝が真上から降るようなバンブーロッジで昼食。網竹にビニル掛け屋根の下のテーブルには、庭先の朱色の花が添えられていた。Ｙさんが上着を脱ぐと「やられてますよ！」下着のＶ衿の先が血に染まっている。衿先にひょいとひっかかってご馳走様をやったものか…犯人の姿はない。さらに下る。アッ、前のＹさんのズボンについているのはゴミではなく蛭だ。払い落とすと「写真を撮ればよかった」…どうせまた出るでしょ。蛭はズッガというらしい。

登りの昼食地点にまで降りた。谷奥にシャブルベンシが見えている。あと少し…。登りの時にはまぶしかった雲母が、湿っていれば黒っぽい石というだけだ。草原に入り、放牧中の牛３頭に道をよけてもらって、とうとう吊橋を渡っ



《シャブルベンシ本村のゴンパ（僧院）内》

た。

本村の外れにあたる水場では女の子達が洗濯に励んでいる。その先の臭うような長屋の前には夕暮時の一時をたむろする住人達がいる。ゴンパ見学を２度空振りしたサーダーは「ここのゴンパを見るか」と聞き、番人を呼ばせた。村は古くて汚いが、その分ゴンパは長く崇拝を受けてきた建物のようだった。電気が点されると、仏像は金色に輝き、左右に木版刷り経本がびっしり収まり、壁画も一流で細かく描かれた物だった。わざわざ鍵を開けさせたのだから寄進する。サーダーも、額をつけて礼拝し、お札を挟んでいた。

さらに吊橋を渡り、階段を上って車道へ。ついに近代文明に接触した。あとは明日崩壊地を３キロ歩くだけだ…嬉しい。ロッジにあがり、スパッツをとく…アレ？！靴下の所でやられている。ホットシャワーをあび、すっきりしてから夕食をとろうとなって部屋に入る。ふと伸ばした指先に変な感触…いた！さらに脱ぎ掛けると、また１匹落ちてきた。ここは蛍光灯が明るい。確かめて確かめて服をまとい、キョロキョロと視線を走らせて、荷物をかたづけた。しかしすっきりしたと同時にやたらそこらじゅうが痒くなってきた。

食料品店もある町だし、最後の晩だから夕食は豪華。ナムカ達はお酒も買い込んでいた。さっきからポーター達も座っているのは、最後のお別れパーティーや、チップを期待してのことなのだろう。食後には「またきてくださいね」とチョコレートで描かれたシュガークリームケーキが出た。チップの額は長岡ＬがＡ社から詳しい相場を聞いてきていた。全体チップとして渡すとピンはねの恐れもあるから、各自に…となると細かい計算と相当の小銭（小額紙幣）が必要で、それは部屋に戻ってからの仕事にするということだった。

夕食前に水洗トイレに流したはずの蛭が、せっせと便器を這い上がってきていた。再度ザーッをやった私だった。

◆８月17日（金）　～カトマンドゥ

朝食後、長岡Ｌは皆を集めてくれと言い、英語で「皆さんのお陰で無事に、かつ楽しくトレッキングを終えられた」と謝辞を述べた。顔を判別できる私が、ランク分けされたチップの包みを一人ずつ配った。

崩壊地の通過があるからまだ山靴がいいかと、最後の身仕度をやっていると、外から戻ってきたサーダーが言う。「道が崩れて、こちらにはトラックもジープも来ていない。バルクーまで２時間歩いてもらわなければならない。」

昨日ここへ着いた時、例のＴＡＴＡがエンジンをふかせていた。赤帽のあの時の男が、ちょっと進んでは停まり、札を受け取っては荷台に荷物を乗せていた。それを見て、あのトラックはそれなりに定期便であって、来る時も特に私達のために手配してあったわけではなく、こちらが便乗したにすぎないのだと納得したものだった。あれが行ったきりで、シャブルベンシには戻っていないのだという。そういえば、２軒隣に停まっていた白いジープもない…。何があっても驚かないつもりではいるが…ぐちゃぐちゃ靴の紐を観念して締めた。

水力発電所の前を過ぎ、鉄橋をわたり…車道はつづら折りだが、歩道はショートカットで上がって行く。草原、とうもろこし畑、民家の庭先と登りつめて車道へ。そこからは水平車道を歩く。たぶん冠水していた箇所がさらに崩れたのだろう。向こうからも歩いてくる人達がいるが、現地語が話せない私達に情報収集はできない。

バルクーとおぼしき村に着いたが車もなければ人溜りもない。いやあな予感。Ｙさんについて最後尾にいたサーダーが追い付いてきて、「

橋がだめになり、もっと先まで歩かなければならなくなった」と言った。やっぱり…。どう時間がかかっても、今日はカトマンドゥまで戻れればよいのだ。傘をもて遊びながら、開き直って歩くしかない。こんなことがちょいちょい起きる車道なら、ヘリで飛び越すしかないなあ。話の種も一度で十分だ。

やっと、バスの姿が見えた。歩いてきた限りにおいて、来る時より崩壊したと思える場所はなく、ましてバルクー以降に、ダメになった橋などは見当たらなかった。何を言ったところで…。４時間近く歩いたので乗ったバスもすぐ、乗り換え地点に着いた。茶店が増えている。ここは覚悟していた歩きだ。来る時よりは見通しがきいて、７箇所あった崩壊地は、ずっと上からガレているのがわかり、かつその一帯は岩と砂が混在してズルズル崩れていく地質であることも見てとれた。

向こう側にバスがいるのかも当てにならない…と思ったが、バスは無事待っていた。林立する茶店の前で、サーダーが「ティー？」という。もうくたくたで「ノーサンキュー」という気にもなれず座り込む。疲れて飲む甘いミルクティーはおいしかった。ふと触れた指先の感触…反射的にテーブルクロスの上に手を振ると、落ちたのは蛭だった。Ｙさんが今度こそとデジカメを構える。よく見ればシャクトリムシのような変わった動きをする生きものだった。ティーの値段を聞くと、コックが手をふり、ようするに行動食のうちとの意味だった。出所はもともと…ながら、サンキューと腰をあげる。

どれだけガタ揺れしても、もうかまわない。トリスリバザールでのダルバート昼食の後は、山を縫い走って、どんどん高度を下げる。現地雇用の二人を下ろし、再び棚田の間も走り抜けて夕暮のカトマンドゥに入ると、すさまじいラッシュ。それも走り抜けてついにラディソンホテルへ。荷物を確かめて最後の握手。

ここまでの車内で、上村さんはナムカと話し込み、彼がまだ学生なこと、オカッパ頭のポーターとは同じ学校の友人であること、短い休暇中のアルバイトであったこと、将来は起業（たぶんトレッキング会社）したいことなどを聞き出していた。その後で「彼は１２年生といったけど、額の脇が結構禿げ上がっていたし…本当の歳はどうなんだろう？」と首を傾げていた。

◆８月18日（土）　～バンコク

パタンを大急ぎ観光して、空港へ。深夜のバンコクで乗り継ぎ帰国。（大幅に省略）

日の出ずる国日本…富士山が雲海に浮かんでいる。ネパールまで出掛けて、ろくに山の見られなかった私達を、日本の富士山が迎えてくれているのだった。

◆エピローグ

そんな富士山も「一度も登らぬ馬鹿。二度登る馬鹿」と言われます。夏のネパールも、一度も見ぬのは惜しく、さりとて二度目は…と言ったところです。二年前には高峰を見飽きた気分になりましたものの、宇宙まで続くような蒼の下の白銀の屏風は、地球という星の最高の芸術品です。その場所まで行ってそれらが見えない日々の間の抜けようといったら…。

雨期も地球が生きている証しですけれど、しょせんその地をかすめるに過ぎない凡人は、いわゆるトレッキングシーズンに出掛けて、最高の芸術品を堪能しぬいた方がいいようです。そんな当たり前の結論に至りました。

ヒマラヤの夏は高嶺の花達のもの…。彼女達が恵みの雨と、時折の日差しと、静けさを謳歌しているのです…。　　（完）

おお、小屋酒場

08.5.17 北陸中日

金大ワンゲル部員、ＯＢ

金沢大ワンダーフォーゲル部とＯＢ会が長年、金沢市の犀川ダム奥にある高三郎山（1445㍍）で登山道を整備している。市の助成金は打ち切られ、本年度からボランティア。それでも17、18日には各地からＯＢらが集まり、登山シーズンの準備をする。

（渡辺聖子）

高三郎山 補助廃止でも自主整備

▲金大ワンゲル部ＯＢが登山道を整備している高三郎山＝2004年撮影（ＯＢ会提供）

『登山道絶やさぬ』

高三郎山はホンシャクナゲや紅葉が楽しめ、山頂付近は県自然環境保全地域の特別地区。「日帰りの白山登山より厳しい」と話す人もいる山で、以前はワンゲル部の新入生トレーニングに使っていた。

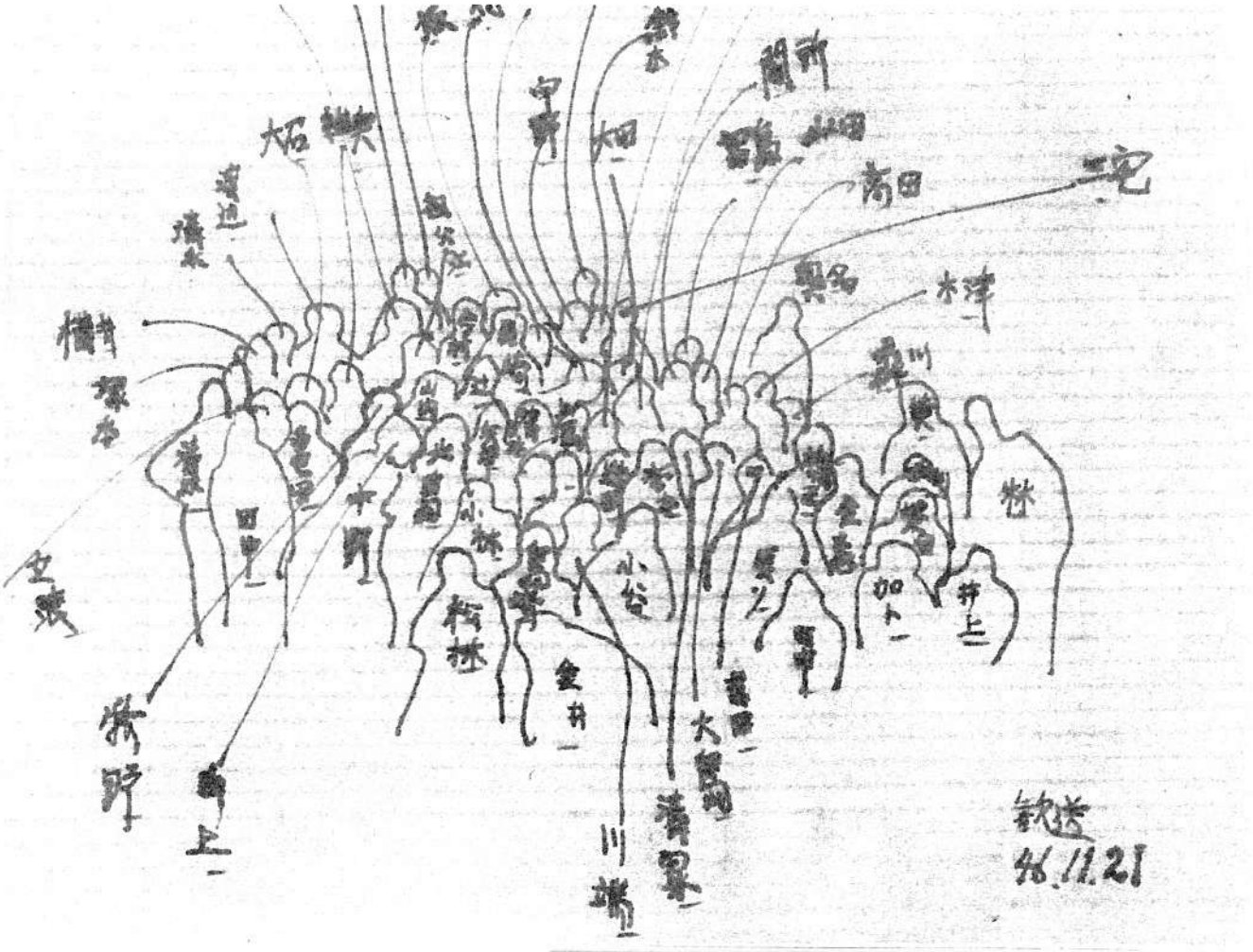
毎年、ＯＢらは五月、現役部員は九月に山に入り、登山道の木や草を刈り、山小屋を整備していた。それでも一時、廃道同然になった。

市は一九九六年度からハイキングコースの整備委託として年二十万―三十万円を助成。この金を生かして登山道が復活した。しかし、険しい山だけに「一般向けのコースでない」との理由で、本年度市から補助が打ち切られた。

ワンゲル部は助成金を遭難などに備えて積み立てていた。現役の男子部員は「捜索でヘリコプターを飛ばすと大金がかかる。貴重な収入の一つだった」と残念がる。

市内に住むＯＢの一人は「廃止の影響で参加する人は限られてくるかもしれない。しかし、放っておけば道はなくなる。愛着がある山だからそうなっては残念だ」と今年も高三郎山に向かう。

♪山小屋よいとこ　一度はおいで～
酒は旨いし　自然はきれいだ♪



15期　佐野　哲雄

私の一番好きな集合写真です。

先代のベルクハイムの前で、６６人が全員笑顔だ。いい笑顔だ。

歓送Ｓ４６．１１．２１。３６年も前、とてつもなく古い写真だ、不思議と隣の名前の表を見なくても、次々と名前が出てくる。

当時、４年生（この年は１３期）や院２年生（同１１期）を送る登山が行なわれていた。恐くも優しくもある先輩、可愛い後輩、そして、楽しくも頼もしい同期の仲間、ほぼ部員全員が参加する楽しい行事だった。

…と、昔を懐かしむ為の文ではなく、与えられた命題は、Ｂ．Ｈ．への勧誘でしたね。

「こんな写真があったよね」と言えば、「そうそう、あんなのも有ったよね」という仲間がいる。口に出さなくても、同じようにＢ．Ｈ．の状況を感じ取っている仲間がいる。なんと素晴らしいことではないか。

そんな仲間と一緒においしい時間を共にしましょうＢ．Ｈ．で。

２００７　　春の山小屋酒場

5月12日（土）～13日（日）

◉メンバー表と行動予定

（ナカオの５月例会山行も同時に実施）

			12日（土）ダム発			13日（日）ダム着
新顧問	竹内義晴	竹内カー	6時発	高三郎登頂	宿泊	11時
6期	小川修司	小川カー	8時発		宿泊	11時
8期	篠島益夫	小川カー	8時発		宿泊	11時
15期	間所新一	間所カー	8時発	ダム直行	宿泊	11時
15期	間所美智代	間所カー	8時発	ダム直行	宿泊	11時
12期	野村益己	長岡カー	6時発	高三郎登頂	宿泊	11時
6期	合津尚	長岡カー	6時発	高三郎登頂	宿泊	11時
11期	長岡正利	長岡カー	6時発	高三郎登頂	宿泊	11時
13期	辰野隆義	辰野カー	8時発		宿泊	11時
13期	吉本良治	辰野カー	8時発		宿泊	11時
13期	大島良治	辰野カー	8時発		日帰り(奥名カー)	
15期	上馬康生	上馬カー	6時発	高三郎登頂	宿泊	11時
15期	佐野哲雄	奥名カー	8時発		宿泊	11時
16期	北川隆次	中野カー	8時発		宿泊	11時
16期	中野淳一	中野カー	8時発		日帰り(中野カー)	
15期	奥名正啓	奥名カー	8時発		日帰り(奥名カー)	
15期	舟田節子	長岡カー	6時発	高三郎登頂	宿泊	11時

ナカオ佐々木（女）佐々木カー　6時発　高三郎登頂　日帰り(佐々木カー)

寺西　（女）佐々木カー　6時発　高三郎登頂　日帰り(佐々木カー)

ナカオ男４　車・・・・・・・・・・・・・　5時ダム発　高三郎登頂

≪山下さんに舟を手配してもらう。これはダム８時発組≫

6期小川　船頭さん　8期篠島

15期間所　15期奥名

《高三郎登頂組　（撮影：15期ナカオ　舟田)》

竹内新顧問　11期長岡

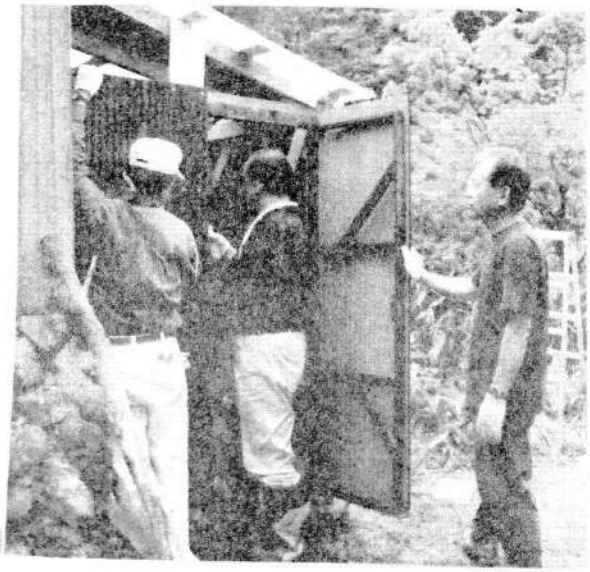
ナカオ　12期　6期　ナカオ　15期

佐々木　野村　合津　寺西　上馬

昼頃登り着いた高三郎の山頂では、木々の芽生えの彼方に残雪の白山。時折濃くなる絹雲の下に遥かに望む北アルプスは、淡くかすみつつも白馬から穂高までの一望。下山は、途中から新道尾根へ。すっきりと立つ新緑のブナが見事でした。　（長岡）

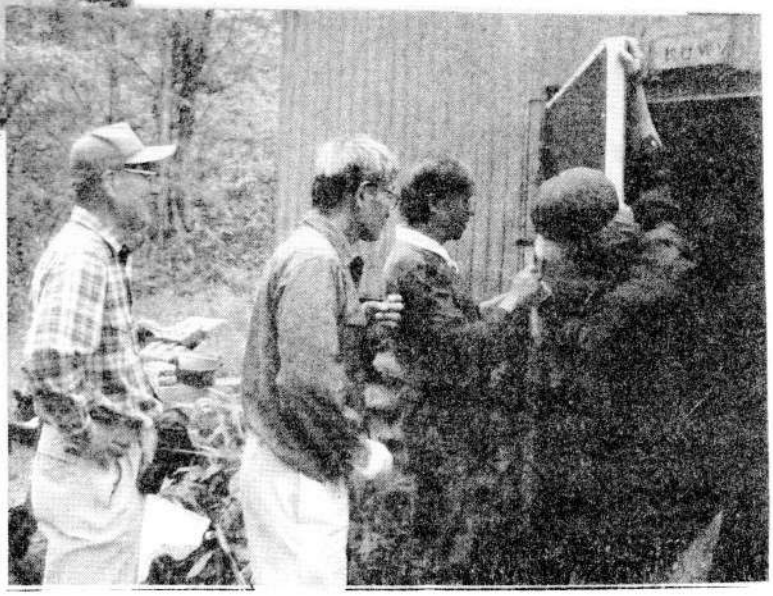
《新道整備をやってくれたナカオの面々。長岡さん差し入れのスイカで供応。》

16期中野　13期吉本　15期間所

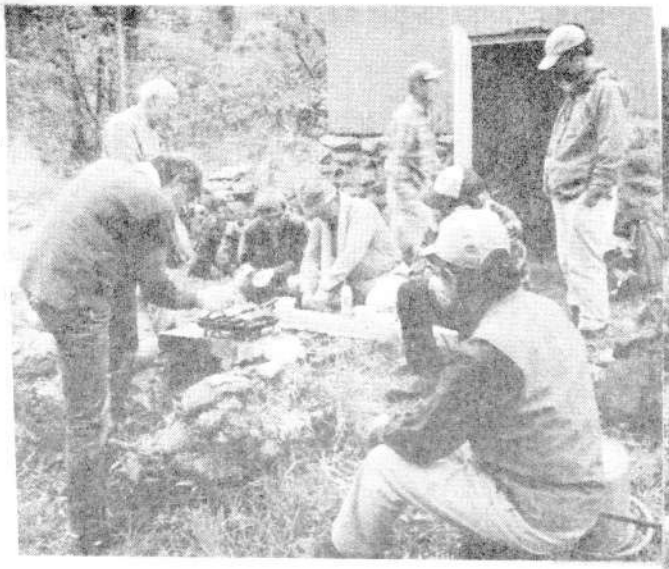


着々と仕上がっていくトイレ
13期大島　13期辰野　13期吉本

さて、たどりついたＢＨでは、小屋の補修（特に戸と水洗トイレ）と水場確保に大わらわの時間帯でした。のんびり山頂往復が申し訳ないような。（長岡）



6期小川　16期北川　15期佐野　田村教祖



12期野村　　6期小川　　竹内新顧問
16期北川　8期篠島　6期合津
15期佐野　　15期上馬

16　15　16　13
北川　佐野　中野　大島
11　ナ　ナ　12　15
長岡　佐々木　寺西　野村　舟田15　13　15　15
間所　吉本　間所　上馬
15　6　3　顧問　6　13
奥名　小川　田村　竹内　合津　辰野

メールから　　8期　篠島　益夫

奥名さん　当日は朝の集合からお手数をかけました。忙しい昼（？）だけの付き合いで残念でしたが。

間所夫妻　美智代さんには、料理、掃除、片付けなどで、初めての参加で勝手が判らない内から活躍頂き、有難う御座います。お疲れがでませんように、これに懲りず、参加して下さい。

舟田さん　酒場の段取り準備カラ山のガイドから、相変わらず皆でお世話を掛けました。いつもながら有難う御座います。ナカオメンバーの立ち寄り、交流も良い刺激になりました。

長岡さん　地学的アドバイス、専門領域からの疑問解決等、知恵を有難う。てんぷらも相変わらず上手ですね。美味かった。

野村さん　高三郎登山、白山展望、ベルクハイム宿泊、山菜料理堪能など、永年の夢が全部実現出来たようでよかったですね。これからも継続参加を期待します。

6期合津　竹内新顧問　田村教祖　15期舟田

メールより　　15期　間所　新一

遅くなりましたが、小屋酒場の写真を送ります。楽しい二日間でした。お世話下さったみなさん、ありがとうございました。

１６期　北川　隆次

◉小屋酒場の記憶

私が参加させていただくようになって何年が経つでしょう、そしてきっかけが何であったのか、もう記憶が定かではありませんが、ここ数年、ベルクハイムに行くことを愉しみにしている自分がいるように思います。そのことを少しだけしたためようと思います。

私自身は１６期であり、昭和４９年のオイルショックが起きる夏に、現在の明るい山小屋への改修計画を実行した代にあたります。この改修計画費用は当時で６０万円ほどで、当時のＯＢ各位の寄付に依存したのは言うまでもないことです。

改修作業は、現役部員全員と１５期の一部のＯＢの方で進められています。詳しいことは、2005年の“やまざと”の中で現ＯＢ会長の栂氏による寄稿を参照下さい。私の記憶で鮮明なのは、オロロを避けて早朝から資材を搬入したが、それでもオロロにかまれたこと。暑さとオロロを避けるタメコンクリート堰堤の深い淵で泳いで気持ちがよかったこと、同期で一人だけ怪我をするやら盲腸になるやらと災難を背負ってくれた者がいたこと、作業はきつかったはずなのに、そんな些細なことしか出てきません。

話は変わって、倉谷の風景の移り変わりが著しいことに驚きます。私達が学生の頃との風景とはいくつか違いがあります。

その１…吊橋を渡ると村の古びた廃屋があり石碑が威厳をもって立っていたこと。

今は廃屋はなく、石碑も倒壊しています。

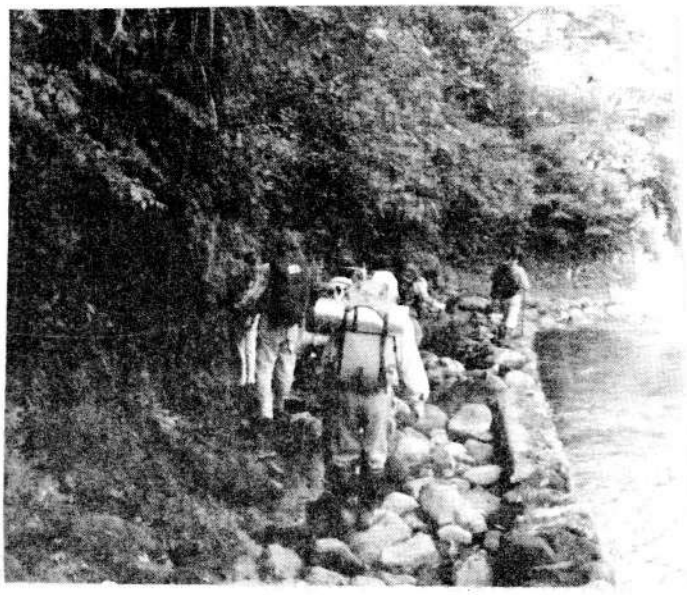
その２…ベルクハイムへの登り口の少し手前には砂地の広場があり、流木に火をつけ、多人数で大きな円陣を作り歌を歌えたこと。

今は川筋が大きく変化しています。

それらが大きく変化したところでしょうか。変わらないのは、ダムから二つ目の切れ込みを過ぎたぶな林区間、ここは変わらぬ“静けさ”をたたえたままです。それと川原からベルクハイムまでの急登でしょうか。毎度のごとく“ここを登れば”という気持ちになります。

◉小屋作業のことなど

１３期の大島さん　辰野さん　吉本さん　吉田さんの長年の尽力と、現役部員の資材搬入支援、それと舟田さんの食事メニューのおかげで、今年の秋は、ついに仕事らしきは、ベルクハイム登り口の草刈りとステップ補修程度で済みました。来春はベンチ作ろうか、いやもっと周りの景観が見えるように、あたりの木立を切ろうかと、より小屋の生活を楽しむ作業に切り替えです。



《水位観測所付近はまもなく、水没の運命》

◉ダムサイトのことなど

この秋は１１期加藤夫妻の同行もあり、写真を撮りながら、花の解説を受けながら、そしてアケビを食べながら、行きは２時間、帰りは２時間半かけてダムサイトを歩きました。現役の頃はダムに着くと、あと一時間ちょっとだと一安心して先を急ぐ道のりであり、最近は小屋修復作業に時間を割くため、ひたすら先を急ぐ道のりでした。きっと来春５月ものんびりと若葉

《道中はアケビの大豊作。15cmものも…。》

色を楽しみながら歩けるはずです。

◉小屋の泊りのことなど

今回　囲炉裏を本格的に使いました。暗闇に上がる炎を見ているのもよいですが、一番よいのは、夕食の時にカメムシの混入をまったく気にしないですむことでした。いつもなら、家に帰ってシュラフを手入れうるとカメムシ臭がするのですが、今回はそれがなく、煙の臭いがかすかにするだけでした。

◉皆様へ

ここ数年はベルクハイムが旬なのです。倉谷で釣り糸をたれるのもよし、高三郎へ登のもよし、ベルクハイムでビールを飲むもよし。

卒業されてから一度も寄る機会に恵まれなかった人ほど、今度一緒に行ってみませんか。

6期　合津　尚

５５周年が何時か、あと何年後か？それまで元気でいられるかは不明なれども、提案をします。

（飯場おばさんの注：来年は創部５０周年です。創建３３年になる山小屋がその来年はともかく、せいぜい持って５５周年までかも…の話が出たため、５５周年という数字になって話が始まっているのです。）

先ずは、何をさておき来年の春の山小屋に参加しよう！

そこでやる気になったら、小屋の延命策を検討しよう。最近我が家も３０数年使った家をリフォームしたばかりで、これが終の棲家となるでしょう。

小屋も段階的に改良・修繕作業をやれば、費用も労力も分散される。そろそろ、金はあるけれど閑もある人、閑だけある人等などが輩出される時期と思う。そこで年度単位のメンテナンス計画をたてるとか、担当を決めるとか、次回小屋酒場で議論しよう。

いろいろな分野で仕事をしたり、趣味があったり、人材と知識には不足はないはずでしょう

《吊橋も健在。クルミ、アケビ、差し入れしてもらったモタセなど、もう秋の実りが一杯》

。当方も橋のメンテナンスの会社に籍を置いていますので何か役に立つかも。

それから５５周年とかの記念事業では、山小屋維持費を寄付して貰うとかすれば、それ以後の老後の介護資金にもなるでしょう。

結論：来年の山小屋酒場に参加して、そこで考えよう！

２００７
秋の山小屋酒場

10月13日（土）～14日（日）

◉メンバー

11期加藤忠好・智美 11期小山清 13期辰野隆義
13期吉本良治 15期舟田節子 16期北川隆次

《旧工学部は今、金大付属高校の仮校舎になっている。見送りに来て下さった井上さん。》

15	16	11	13	11	11	11
舟田	北川	加藤	吉本	井上	加藤	小山

１１期　加藤　忠好

今年就職した娘が「幸せのちから」という DVD レンタルを借りてきた。いかにもアメリカ映画だ。英語のタイトルが Pursuit of happiness ではなく the pursuit of happyness となっている。映画の最初のシーン、主人公がドアに書かれた綴りの間違いを指摘するが、指摘された方がヒスパニック系で英語がわからないという仕掛けがある。この間違いは何を意味するのか、私にはわからない。いつか英語で飯を食ってきた井上さんにおしえてもらうことにしよう。映画の筋書きはこうだ。数学的素養があるらしいが経済的に窮乏している男の物語である。妻に逃げられても息子を手放さないで頑張っている。いつかは幸福になると信じて努力する。努力してもさらに状況は悪化していくが、最後にその努力が報われるというものだ。Pursuit of happiness は合衆国独立宣言に出てくる言葉である。独立宣言の存在は知っていたが、内容については記憶がない。「自由」「平等」「幸福の追求」を天賦の人権としているらしい。第 3 代大統領となるジェファーソンが起草したものであるが、「幸福」を彼はなぜ与えられる権利でなく、追求する権利としたのだろうか。このことがこの物語の伏線であるようだ。

眼を転じて日本。山紫水明の国といわれてきた。どこにでも豊かな緑が続き、清らかな水が流れていた。まさに天賦の自然であった。現代の日本人はどうか。都市生活者のほとんどは、山紫水明は死語に近いものとして諦めている。いや、諦めているのではなく希求しないだけである。

今年の暑い時期だったと思う。小屋酒場の案内が届いた。毎年案内は来るが行ったことはない。だいたい私は下戸である。学生時代は追い出し登山に毎年参加していた。が、酒を飲むのは好きでなかった。その頃は、レッドは学生でも手の届く高級酒だったらしく、これをアルミの食器で飲むのだ。付き合いだから、底から 5mmの深さぐらいついでもらい、それをチビリチビリ時間をかけて飲むことでごまかしていた。せっかく山小屋に行っても呑兵衛の愚痴なぞ聞きたくない。そんな場面では紫煙が幅を利かすのが相場だ。長い間、そのような幻想から小屋行きを避けていた。

KUWV 創立 45 周年記念行事以降、OB 会近畿支部が発足した。これも篠島さんのお陰というか執念というか、ほぼ毎月に近い形で例会がある。学生時代の活動とは趣が違い、私のようなメタボ症候群でも参加できるような計画を立ててくれるのがあり難い。特によく集まるのが、正月前後の会と秋のサンマパーティである。秋の会には、奥名さんや舟田さん等が金沢からよく参加される。そういうこともあり、その返礼として今年、おそるおそる山小屋酒場を覗くことにした。ついでにと金沢近辺在住で同期の小山さんや井上さんを誘ったが、小山さんが一緒に参加してくれることになった。

バスが遅れ、集合地に旧工学部前に行くと今回の参加者が待っていてくれた。井上さんが、慶事の当日であるにも拘わらず見送りに来てくれた。犀川ダムまでは、快適なドライブである。駒帰のバス停から歩いた昔が懐かしい。が、ダムまでの 2 時間の歩きは今ではもう出来そうにない。ダムからブッシュの中を歩くつもりでいたが、ミゾソバとツリフネソウの見事なお花畑であった。今年は、アケビが豊作。しかも、きれいな薄紫をしている。バナナのように口に含む。アイスクリンのような食感が口の中に拡がる。甘い汁をクチュクチュやって、唇を細めて種を思い切り遠くまで吐き出す。なんともいえない快感だ。そんなことをしながらダム湖の入り江を過ぎ、吊り橋を渡ると倉谷だ。水が透きとおるようにきれいだ。いつの時代にまでタイムスリップしているのだ。ここは見渡す限り山紫水明の世界なのだ。その中で、小屋に水を引き、小屋の前の草を刈り、小屋の掃除をし、小屋の手入れをする。小屋の前には胡桃の木がある。実がいっぱい落ちているので拾って洗う。

小屋酒場という語感から勘違いしていたのだが、山小屋で飲んだくれるのではなく、自然の中での作業を楽しむのが主目的であるようだ。今回のように辰野、吉本、北川さんなどの金沢在住の有志が丁寧な維持管理の仕事をしてくれているからこそ、快適な小屋生活が可能なのだ。床板もベニやではなく単板だ。だから、実に感触がいい。舟田さんは相変わらず凝り性だ。今回も「加賀御前」と称して色々な加賀野菜を使った料理を準備してくれた。**白山堅豆腐の朴葉味噌焼き、加賀蓮根の蓮蒸し、もたせ入り芋煮、む**

かご入り栗ご飯。それを山小屋でするのだからすごい。特に、蓮蒸しがうまかった。お茶会もあった。清冽な谷の水を使う贅沢がどこにあろうか。

今回の小屋作業は燻しだとのこと。谷の流木を集め囲炉裏で燃やした。猛烈な煙だ。小屋だけではなく、人間も燻される。昭和 43 年の正月にどか雪が降った。剣岳に入っていた金大山岳部が遭難した。連日の報道の中で、我が KUWV はその救援活動をしていた。宿舎は早月川最奥の伊折。自分たちの食料も慎ましかったが、暖といえば囲炉裏の火だけであった。夜は燻され、昼は吹雪の中を馬場島までボッカ作業に明け暮れた。燻されながら、ふっと、そのことを思い出した。家に帰ってからもザックに沁みついた臭いが取れない。今回もそうだ。体や頭についた臭いは、帰りに立ち寄った曲水温泉ですっかり洗い流したが、ザックに沁みついた臭いはとれない。懐かしいが困る臭いでもある。しかし、それは山紫水明の地にいた証でもある。「山紫水明」は死語ではない。今もベルクハイムに息づいている。希求すればいつでも手に入る。幸福はやってくるのでなく、求めるものであるのと同様にである。

先日ザックを嗅いで見たが、沁みついていた煙の臭いはいつの間にかすっかり抜けていた。いつの日にかまた、我がベルクハイムを訪れることにしよう。誰かを誘って。緑豊かで、清冽な水が流れ、学生時代の気分にふっと戻られる空間を・・・・

《昼の膳　明石サンマパーティー残りのそうめん（元は４期下出さんのさしいれ）
倉谷産ミョウガ、子持ち鮎甘露煮　白山堅豆腐の朴葉味噌焼きなど。
山小屋には炊事具一式の他、食器も１２人分が常備されています。》

《本場クサヤを焼き、加藤家隣の庭からのスダチをかける贅沢な朝食》

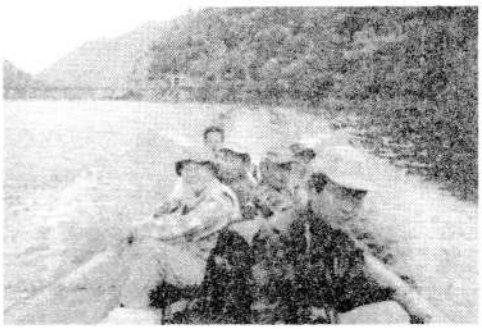
《背後には小屋いぶしの煙が…。手前は新設した流し場のベンチ》

平成 20 年春の小屋酒場

平成 20 年 5 月 17-18 日
両日とも晴れ

5 月初めの頃に夏を感じさせる程暑いと感じる日が続いた後、一転して家の中でもフリースを着たくなるくらい寒く冬に戻ってしまった。倉谷もさぞかし寒いだろうと予想して当日 17 日を迎えた。創部 50 周年を祝うかのように天気予報は晴れを予想し、かつ気温もほぼ平年並みの爽やかな初夏に戻っていた。

各地からそして久しぶりに会う面々は山形・千葉・埼玉・東京・滋賀・兵庫そして地元と今回は東日本からの参加者が目立ち、いつものメンバーとは少し違って年齢の割には新鮮な顔ぶれとなった。今回のお誘い文「すでに築後３５年。補修にも限りがあります。いつまでもあるわけではないのです。」の一言が響いたのかもしれない。



例年よりもちょっとばかり季節は先へと進み、犀川ダムの水位も幾分低い。春はこの水位のおかげで倉谷まではボートであっという間に入ってしまう。資材も人間も楽々行けるのがこの季節の第一の魅力である。新緑の中に平地ではキリの花が、ダム湖をめぐる山々にはフジの花、道のわきにはムラサキサギゴケ、ヒメシャガといった上品な紫色の花が多い。

Bergheim までの道は来るたびに様子が違っている。崩れてしまった場所もあれば、次来た時は崩れてしまっているのではないかと危ぶまれる個所、流されてきた石で埋まってしまった場所。それでもこの付近を訪れる人々により道はしっかりとしている。

先発高三郎登頂組 6 人は 6 時にダムを出発し 12 時少し前に頂上に全員登頂。
後発小屋作業組 9 人は 8 時にダムを出発し資材を担いで 9 時に全員山小屋着。

山小屋の登り口に毎年テントを張っている K さん今年も健在。前を通るたびに「一杯やっていけ」「これを持って行け」と声をかけてくる。田村さんと気があってよく話し込んでいたが今年は来られないと知って残念がっていた。

K さんからのいただきもの…サッポロビール（株主なのでほかの銘柄は飲まない）、ウド、カタハ、ススダケ、２０ｃｍ以上あるイワナ（スミ、串つき）

小屋作業組は到着して休む間もなく、内部の掃除・水確保のため取水口の整備・石段整備・山菜採り・流しの周りのタイル張り・夕飯の準備と盛りだくさん。春先小屋の内部は床に一面白い斑点模様がついている。ヘビの糞か鳥の糞かそれとも他のものか。白い斑点は 2 種類あるようにも 1 種類だけのようにも見える。おそらくは鳥の糞ではなかろうかとの上馬研究員の見解。それも見る見るうちに取り除かれてきれいな床に変身する。お昼には差し入れのウドンをいただく。

石段の整備はなかなかの重労働である。河原から平面的な石を運びあげ、それを埋める適当な穴を掘り安定するように調整しなければならない。素人の俄か作業にしては出来栄えはまずまずだが、雨が降るとどうなるかかなり心配ではある。

流し場の周りは凝り性な人たちが主体となってタイルを張っていく。このタイルの下に水はけを良くするために砂を敷く。もちろんこの砂は河原から運び上げなければならない。この運搬がまた重労働で、上ってくる途中で一部を捨てた人もいるほどなのだ。そんな苦労をしてもいざそれをあけてみると余りの少なさに愕然とする。タイル自体もかなり重いのだが、そのきれいに見えるタイル張りの下には多くの人の苦労が隠れているのだ。

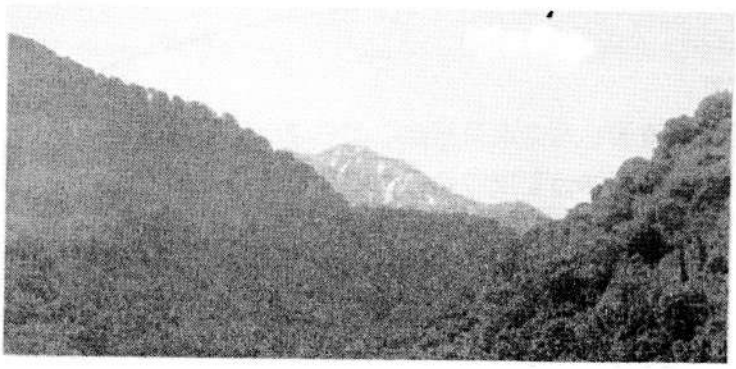
夕飯の食材となる山菜採りは自動的に小川さんの役目となる。小屋のすぐ後ろはワラビ畑、探すまでもなくニョキニョキと背丈も高く太めのやつがいくらでもある。だからと言ってひねているわけでなくやわらかく上等なものである。さらに奥にはこれまた上等なススダケがとれる。しかしこちらはやや季節遅れで伸びすぎてやや硬いところが多い。倉谷川沿いではカタハ、ウド、ワサビなども獲得。コゴミは化けてしまって見送る。どれもこれもこのあたりに生えているものは皆太く大きいものばかり。普段食べているものがみすぼらしく思える。

高三郎登頂組は予定では4時に小屋に戻ってくることになっている。5分と違わず到着。故障もなく全員登頂を果たし無事戻ってきた。皆さんたいしたものだと敬服する。

下のKさんからいただいたイワナは吉村さんが捌く。慣れた手つきできれいに内臓を取り出し、さらに胃袋の中を洗い流す。丸のみしたようなカワゲラが3匹そのままの形で出てきた。一緒にもらったスミを熾してじわじわとあぶる。2匹では喧嘩になるといけないというのでイワナの骨酒にする。裏山で採ったススダケを一緒に焼く。食べるだけでなく芳ばしい香りもまた楽しめる。

山の幸を主とした夕飯はもちろん大変なごちそうだが、何といってもビールが最高にうまい。普段それほど飲まない人にも倉谷の自然の中で仲間たちと飲むビールは格別な味わいにちがいない。素敵なひと時をありがとうございます。

5期	稲葉正己	資材運び、砂運びと大車輪の活躍
6期	合津　尚	今生の別れはまだまだのようです
6期	小川修司	今回は関西代表　山菜ばかりでなく流し台作りに精魂を込める
6期	池田　進	遥々山形米沢から来沢　高三郎と山小屋と仲間を楽しむ
7期	吉村弘二	遥々千葉から来沢　イワナの捌きは見事
9期	山中重夫	関東を盛り上げるキーマン　スキーも高三郎にも積極的
13期	辰野隆義	初代オヤジ　ベルクハイムが残っているのはこの人のおかげ
13期	吉田穂積	2代目オヤジ　体全体からあふれる優しさ　緻密な作業
13期	三尾秋子	中退するも山小屋が忘れられず埼玉より来沢
15期	上馬康生	白山を隅々まで知る男　山小屋最多利用者のひとり
15期	奥名正啓	最近はいつも日帰り参加　今回はゆっくり一泊　最も気の利かないひとり
15期	間所新一	近江八幡より来沢　夫婦同伴はすてきだ
15期	間所美智代	東京町田より来沢　小屋作業組の賄いを命じられる
15期	舟田節子	初代山小屋のオバハン　交代は当分望めそうもない　殿堂入りを狙う
16期	北川隆次	3代目オヤジを襲名　名実ともに頼れるが後に続くものが課題



Bergheim いつまでもあると思うな！
でもいつでもあなたを待っているよ！

文責　15期　奥名

女史のコトバ、信ずるべからず…

7期　吉村　弘二

2008年5月17,18日の春の山小屋酒場に参加させていただきありがとうございました。卒業以来、登山らしい登山をやったのは40年ぶりで、舟田さんのネットに心が躍り、電話で登山を申し込んだ時も登りだしたときも、高三郎頂上まで5時間近くもかかるとは、まったく予想もしておりませんでした。

特に旧道との合流点手の急な登りは「(この急坂は)あと百歩よ。」という女史の言葉を信じて、歩数を数えながら半分遣って登りましたが、私の歩幅が狭いにしろ確か二百歩はありました（女史の言葉を半分信じてなかったんだ)。

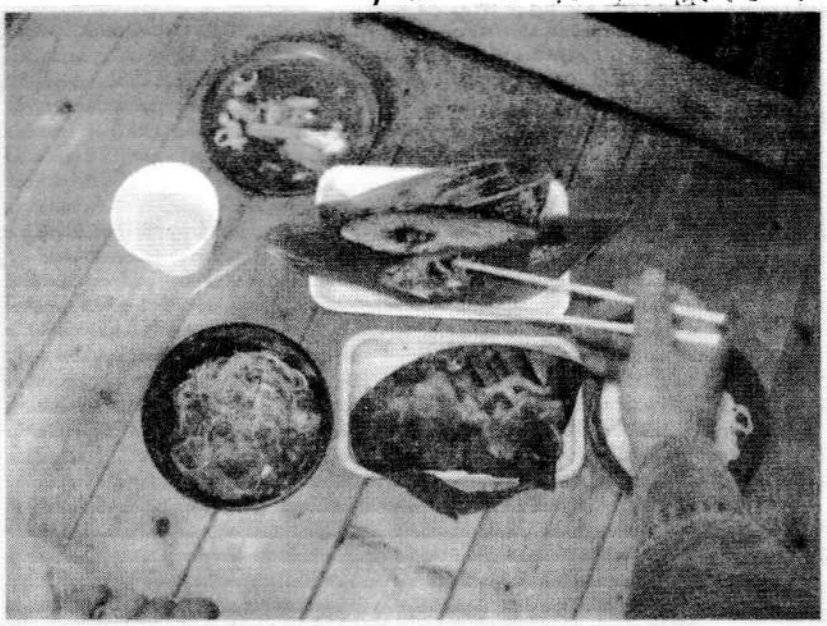
さらに、頂上の雪渓で飯を食い「さて下りは1時間半かな？」と思いきや3時間以上もかかり、登りよりきつく、腿、ふくらはぎ、膝…　足全体ががくがくで昨日21日まで座った姿勢から立ち上がるまで両手と「よいしょ！」の掛け声が欠かせませんでした。

しかし、新緑、しゃくなげをはじめいろんな花と頬をなでる風、夜の一杯はさらによかった。

舟田さん,上馬さんをはじめ、準備、設営をしてくださった皆さん。本当にありがとう！これからもぜひ参加させてください。

photo　11期 加藤 忠好

美味しそ～



小屋酒場って、リッチやなぁ…

１３期の吉田穂積です。
初代「山小屋のオヤジ」の１３期辰野隆義さんの東京転勤にともなって引き継ぎましたが、次期は１６期北川隆次さんにやって頂けることになりましたので、お知らせします。　１６期は現在の山小屋建設の中心になった人達です。

2007年度　現役活動報告

＊＊＊

３月／１，２年山行（熊野古道）

東海道 PW（ロード）

４月／歩荷物トレーニング（卯辰山）

５月／新歓ハイク（宝達山）

新入生レーニング（医王山）

総会

６月／結団式（犀川河川敷）

第一回トレ山（獅子吼）

７月／第二回トレ山（白山）

８月／夏合宿（北海道）

第三回トレ山（別山）

夏合宿（南アルプス）

９月／夏合宿（北アルプス）

小屋作業（高三郎）

１０月／剱、立山 PW

１１月／赤兎 PW

１２月／冬合宿（荒島岳）

１月／追いコン

２月／雪上訓練（医王山）

＊＊＊

【夏合宿のパーティー分け、工程】

★北海道 P

メンバー：L 大和(3)、SL 藤嵜(2)、下風(2)、金澤(1)、佐藤(1)、新谷(1)、山形(1)

工程：十勝岳温泉登山口―富良野岳―十勝岳―美瑛岳―トムラウシ山―化雲岳―忠別岳―白雲岳―黒岳―旭岳―旭岳登山口

★南アルプス P

メンバー：L 小島(3)、SL 河原(3)、浦地(2)、江崎(2)、北(2)、清水(2)、片田(1)、他谷(1)、

工程：便ヶ島広場―聖岳―赤石岳―荒川岳―塩見岳―間ノ岳―北岳―広河原

★北アルプス P

メンバー：L 横山(3)、SL 石川(3)、小平(2)、中山(2)、安井(2)、加藤(1)、杉山(1)、福田(1)、町田(1)

工程：折立―薬師岳―水晶岳―鷲羽岳―三俣蓮華岳―双六岳―槍ヶ岳―大天井岳―燕岳―中房登山口

50期主将　4年　大和英仁

ワンゲル創部 50 周年おめでとうございます。ワンゲル創部 50 周年のこの機会に現役としていられることに喜びを感じます。入部したての時には「君たちは 50 期だよ。」と先輩から言われても何のことか良くわかっていませんでしたが、これからもワンゲルの歴史と伝統を受け継いでいけたらと思います。緒先輩方から言わせれば、そんなこと言ったって自分たちの時とは随分変わってしまったじゃないか、と思われるかもしれません。確かに「ペミカンって何ですか？」「ワンゲルの歌とは？」っと聞いてしまう現役がほとんどだと思います。しかしやっぱりエールは続けています。また、現在ワンゲルには３人の留学生も入部されておりグローバル化（？）の波が押し寄せています。何かは変わるかもしれませんし、やっぱり変わらずあり続けるかもしれませんが、「ワンゲル精神」はいつまでも持ち続けていきたいと考えています。これからも OB の方々と現役で交流していければ幸いに思います。

2008年度　現役活動予定

（3月）１・２年山行　屋久島（宮之浦岳）
４月　歩荷トレーニング　卯辰山
５月　新歓ハイク
　　新入生トレーニング山行　医王山
６月　第１回トレーニング山行　奥獅子吼山
７月　第２回トレーニング山行　白山
８月、９月　　夏合宿

①北アルプス	（L）	浦地
②南アルプス	（L）	中山
③八ヶ岳	（L）	清水
④北海道（大雪山）	（L）	小平

９月　小屋作業　高三郎山
１２月　冬合宿　荒島岳 or 経ヶ岳
２月　　雪上訓練　医王山
３月　　１・２年山行　　※ＰＷは随時

51期主将　浦地好古

金大ワンゲルは今年で５０周年という大きな節目の年を迎える。そんな年に現役部長として立ち会うなどと入部当初は思いもよらなかったが、非常に光栄なことであると思う。５０年という長い期間に渡る先輩方の活動の積み重ねの上に、今のワンゲルがあるということを強く意識し、その歴史を引き継いで、部を盛りたてて積極的に活動していきたい。

ワンゲルに入ってからの２年間を振り返ると、色々な山に登ってきた。天気が良いことがあれば悪い事もあり、いつもベストな状況で登れたわけではない。川に落ちた、ハチに刺されたなど色々なアクシデントもあった。一年の頃の新トレは雨、トレ山（白山）は豪雨で最初の頃はキツイという思いが強かったように思う。しかし、徐々に山を好きになっていったのは確かだ。仙丈ヶ岳からの御来光や快晴の劔岳からの景色を見て感動したことは良い思い出である。これまでの２回の夏合宿はどちらも南アルプスに行ったので、今年は北アルプス（常念岳～槍ヶ岳～笠ヶ岳）に行く予定である。精一杯山を楽しみ、そして今までで最高の山行にしたいと思う。

金沢大学ワンダーフォーゲル部ＯＢ会・会報誌「やまざと」VOL.22　愛しのチョンボ号

発　行　日■平成20年6月
発　行　者■梶　典雅（19期）
編集責任者■大野直子（21期）
印　　刷■プリントショップ多田

事　務　局■金沢大学ワンダーフォーゲル部ＯＢ会
〒920-0226　石川県金沢市粟崎町2-111
大野　直子
TEL&FAX 076-237-8706　E-mail ohno@yu.incl.ne.jp

梶　典雅　会長　E-mail　togatotoro@yahoo.co.jp
名倉 均 名簿担当　E-mail　nag2138@po3.nsknet.or.jp

KUWVＯＢ会ホームページ（管理人/15期・奥名正啓）■http://www.kuwv.net

振込口座■郵便局／00780-3-14120／金沢大学ワンダーフォーゲル部ＯＢ会
振込口座■北國銀行本店／普 223703／金沢大学ワンダーフォーゲル部ＯＢ会

ハクサンフウロ　室堂平にて　21期・N.O